

清末小説から

131

2018.10.1

いくたびかの阿英目録21……………樽本照雄 1

莎劇のようなもの(上)——文明戯シェイクスピア……………神田一三 3

自爆する日中の研究者たち 2——清末小説と林訳をめぐって……………樽本照雄15

田漢漢訳『ハムレット』の底本 3完……………荒井由美27

对陈家麟生平及其译作的补遗与考证……………王 玉37

清末小説から36、43

★『清末民初小説目録 第10版』を公開しました。樽本著、李艶麗訳『林紓冤案事件簿』(北京・商務印書館2018)は書店で入手できます。来年の予告を。樽本『清末小説三談』を準備中

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

いくたびかの阿英目録21

樽 本 照 雄

定期発行説を前提にした汪家熔の反論

研究内容が時間の進行と共に発展し深化している。私と汪家熔の『繡像小説』編者問題討論は、その研究の進展と切り離すことはできない。論争を継続しながら新しい資料が出現するのを見ていた。

この時点で『繡像小説』発行遅延説は出現し

ていない。あくまでも定期発行説が信じられていた時期である。大切なことだからくりかえす。「老残遊記」第11回原稿は1905年に復元するためにふたたび書かれた。ここが要点だ。

『繡像小説』編者は李伯元だと私は主張している。私が汪家熔に反論する主な根拠は、劉鉄雲「老残遊記」と李伯元「文明小史」の盗用事件であった。

「老残遊記」第11回原稿から字句を「文明小史」に盗用できる人物は、『繡像小説』編集者しかいない。ならば、李伯元が『繡像小説』の編者である証拠だ。

これに対して汪家熔は「劉鶚和李伯元誰抄襲誰？」(「文学遺産」第660期『光明日報』1984.11.6)を反論として公表した。

「盗用したのはどっちだ」。ここにその主旨を見ることができる。李伯元が劉鉄雲を盗用したのではなく、その逆だと主張する。天津発山東済南行きの夜行列車のなかでこれを読んだ。

「老残遊記」の舞台となった済南市内と近くの

黄河を自分で見るための小旅行だった。読後の感想はひとこと。おかしいことをいうものだ。何も知らない中国人が勝手なことを言っている(中国人研究者が外国人の論文を批判する時の常套句をもじったもの。「外国人」を「中国人」に置き換えた)。奇妙に感じたことをおぼえている。

劉鉄雲のほうが李伯元から盗んだ。その根拠はなにか。従来から言われている『繡像小説』定期発行説にもとづいた「文明小史」の公表時期である。

盗用が問題になっている「文明小史」第59期は『繡像小説』第55期に掲載発表された。その時期は、乙巳(1905年)七月初一日だ(これが当時の定説)。それに対して劉鉄雲が「老残遊記」第11回原稿を書いたのは、同年十月初三日である。それを指摘したのはほかならぬ樽本だ(汪家熔は、私の文章を知っていたらしい)。「文明小史」よりも約三ヵ月後に書かれた「老残遊記」には「文明小史」と同じ字句が見られる。あきらかに劉鉄雲が李伯元を盗用した。

汪家熔は「老残遊記」の執筆過程全体には興味がない。一部は見たのかもしれないが全体の流れは度外視している。

李伯元は「老残遊記」原稿第11回を手元においていた。この事実を私が指摘しているにもかかわらず無視する。最初から認める考えがない。事実を承認してしまうと汪家熔の立論が成立しないからだ。簡単な理由である。これが汪家熔による反論の趣旨だった。

汪家熔は「老残遊記」の成立、あるいは掲載中止の詳細を把握していない。出てくるはずのない反論を見て私はそう感じた。「老残遊記」執筆過程について重要箇所をまるで存在しないようにふるまったのである。汪家熔の論文を読んで私はそう判断せざるをえなかった。汪家熔はとにかく樽本に反論したかったようだ。論拠が成立するかどうかは汪家熔にとってはどうでもよかった。

李伯元は、自分の「文明小史」に「老残遊記」第11回原稿(李伯元が没書にした劉鉄雲第11回原稿そのもの)からいつでも挿入することができる状況にあった。李伯元の死後は欧陽鉅源がその原稿を保管していた。没書にされた劉鉄雲は、それを復元する必要がある。それが劉鉄雲1905年日記に記述されている。この重要部分が汪家熔には理解できない。あるいは理解するつもりがない。

結論からいえば、汪家熔は表面的な時間をただ比較しているだけだった。

「文明小史」第59回を掲載した『繡像小説』第55回は、劉鉄雲日記の「老残遊記」第11回原稿を執筆した時期よりも先行している。しつこいようだがくり返す。「文明小史」の公表時間は、当時の学界常識からすれば「老残遊記」原稿執筆よりも早い。だから、先の李伯元を後の劉鉄雲が盗んだ。それだけのことだ^{*68}。公表時間の前後すら成立しないことは後述する。

汪家熔は、自説に都合がいいように、あるいは樽本に反論するためだけに「第11回原稿」という字句をつかまえる。私は劉鉄雲が下書き原稿に基づいて第11回原稿を「復元」したと説明している。しかし、汪家熔はあたかも劉鉄雲が新しく第11回を書き下ろしたかのようにわざと曲解するのである。

彼は自分の立論に役立ちそうな箇所だけを取捨選択して抜き出す。しかも勝手にゆがめて批判材料に利用している。ほかの事項との整合性は考慮しない。どこかで同じことを経験した。

『繡像小説』の主編が李伯元であるという商務印書館の新聞広告が発見された。この重要資料を汪家熔は無視した。それとかわらないではないか。自分の立論が崩壊するのを認めたくない。そのためには末節であろうともしがみつ。自滅するはずだ。

のちに、汪家熔は手紙とともに長文の論文を私のところに送ってきた。彼は事情があったことを説明している。

汪家熔説を批判する私の文章が『光明日報』に掲載されたあとのこと。商務印書館の彼の同僚が、日本人にやられたそうだとわざわざ嫌味を言いにきたそうだ。なるほど、汪家熔は反論を書かざるをえない立場におかれたらしい。彼は説明する。『光明日報』編集部に論文を送ったところ樽本と同じ字数でなければ掲載しないと返却してきた。しかたなく短縮した文章が新聞に掲載された。

私にいわせれば、『光明日報』の編集部は公平である。最初は拒否されたくらいに長文の反論だった。送られてきたのは、その元原稿だ。私は彼にかわって日本語の題目をつけた。本文は中国語原文のままを掲載してもらったのが、汪家熔「李伯元と劉鉄雲はどちらがどちらを盗用したのか」(『中国文芸研究会会報』第57号1986.1.30)である。

論旨は同じことだ。反論になっていない。

ここからが新しい展開になる。

罫

【注】

- 68) 樽本「劉鉄雲が李伯元を盗用したのか——汪家熔説を批判する」『大阪経大論集』第166号1985. 7. 15、121-127頁。要旨：李伯元が劉鉄雲の文章を盗用したのではなく、その反対で、劉鉄雲が李伯元の文章を盗用したと汪家熔は主張する。その根拠は、「文明小史」発表後に劉鉄雲によって加筆された78字が「文明小史」に1字の変更もなく掲載されている、ということだ。しかし、それは事実ではない。虚偽を反論の基礎とするならばこの論争は継続しても無駄なことだ。

次号の公開は2019年1月1日を予定しています
清末小説研究会 <http://shimatsu.main.jp>

莎劇のよなもの(上)

——文明戯シェイクスピア

神田 一三

本稿の題名は、副題である文明戯シェイクスピアを指す。

文明戯の主宰者はシェイクスピア(莎氏)の戯曲(莎劇)だと宣伝している。だが莎氏原作ではあっても莎劇そのものではない。基本的には別物である。その理由は簡単だ。文明戯シェイクスピアは、莎劇から直接漢訳してはいないからだ。台詞についていえば翻訳ですらない。ほとんど創作だといっていいただろう。莎劇の名前をかりて一部は中国風に改変したともいわれる。

林訳と文明戯

周知のとおり文明戯シェイクスピアの根底には林訳『英国詩人吟辺燕語』(1904)が存在する。『吟辺燕語』は、ラム姉弟『シェイクスピア物語』を翻訳したものだ。ラム姉弟は莎劇を小説化し、林紘+魏易がそれを漢訳した。小説を翻訳したから小説になったにすぎない。ところが文学革命派は、林紘たちが無知だから戯曲を小説に書き換えたといふ非難した。林紘にたいして行なった根拠のない誹謗すなわち中傷である。

文明戯は林訳小説をもういちど戯曲に書き換えるという複雑な過程を経て成立した。図式化すれば、莎劇→ラム姉弟小説→林訳小説→文明

戯という流れになる。莎劇から文明戯にいたるまで中間に2種類の英語と漢語の小説を經由している。

文明戯シェイクスピアは、新聞に掲載した公演広告に莎氏原作をうたい莎劇を意味する単語を大書した。しかし『吟辺燕語』が存在していることは一部を除いて基本的に触れない。ましてやラムの名前を広告で提出することはまったくない。その内容は莎氏原作から遠く離れたものだ。成立の過程を理解すれば容易に想像できる。

文明戯は、林訳から粗筋を借りただけ。台詞は創作した。その脚本は残っていない。ラム本の林訳によって莎劇の概略は伝えられたかもしれない。だが文明戯の台詞そのものは莎劇とは似てもつかないものにならざるをえない。

孟憲強『中国莎学簡史』(1994)^{*1}がある。鄭正秋が袁世凱を批判するために「竊国賊」を作った時のことを次のように説明している。「演出をする時、鄭正秋は新しく作った挿入歌を加え戯曲の影響力を強化し観客の憤怒の感情を歌うと一節ごとに喝采の声があがるという藝術的效果を獲得したのだった〔在演出時鄭正秋還加上了新編的插曲，加強了戲劇的感染力，唱出了觀衆的怨憤之情，獲得了一句一彩的藝術效果〕」11頁

ここを見れば文明戯「竊国賊」は莎劇の「ハムレット」とは別物であることが明らかだ。しかも上演日時が推移し役者も入れ替われば、それにつれて台詞が変化するのは目に見えている。当事者の証言によれば、脚本がないから台詞の相当部分が役者の自由に任されていたともいう。「莎劇のようなもの」と称する理由だ。

いうまでもなく翻訳にも時代の流れがある。莎劇は最初から戯曲のままに漢訳しなければならないなどと私は考えていない。

外国作品は多種多様な形で中国に移入された。原書に使用された言語も各様だ。書かれた原語に基づかなければ翻訳ではないという人がある

だろうか。そういう硬直した思考では翻訳は成立しない。林紓らが翻訳したスペイン、ロシア、日本作品などは、ほとんどが英語からの重訳だ。

当時は日本語経由で漢訳された作品も多い。あるいはフランス語原作から英語訳を経て重訳した例も少なくはない。たとえば、胡適はドーデ作「最後の授業」をあたかもフランス語原作から直接漢訳したように装った。しかし実際は英語に重訳したものを底本にした漢訳である。胡適が擬装した理由は林紓批判と関係する。外国語ができなかった林紓は協力者が原書から翻訳するのを聞きながら文言を用いて筆記した。林紓の間接訳を批判するためには胡適自身は直訳したと装う必要があったということの意味する。

それらを否定するならば中国の翻訳史には空白時期が発生するだろう。いろいろな経路を通じて漢訳が生まれた。まことに普通で当然のことではなかろうか。

ラム本を漢訳した『吟辺燕語』が刊行されると読者は大いに歓迎した。郭沫若自伝『少年時代』(1951/1957)には『吟辺燕語』を賞賛した回想部分(127頁)がある。林訳を擁護するとき必ずといっていいくらい紹介される。逆に林訳批判のときには言及されない。無視である。賞賛があろうがなかろうが『吟辺燕語』そのものは重版をくり返している。その時代的要望に合致したということだ。また、それにもとづいた文明戯が出現するのもその必然性があった。中国の当時の状況においてはそれぞれが存在する価値がある。それらを踏まえて莎劇から始めて全訳された田漢漢訳『ハムレット』が出現するという順序だ(単行本は1922年)。

瀬戸博士は林訳『吟辺燕語』について「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」と批判した。ならば『吟辺燕語』をもとに創作したにもかかわらず莎劇だと宣伝した文明戯に対しては、その2乗の批判をするのが当然だろう。それをしないから評

価の二重基準だと私は指摘している。

現在の政治基準を過去に押し当てて判定することには意味がない。林訳は批判するが文明戯に関しては問題視せず黙過するという評価の二重基準は、研究として成立しない。私はそう言っているにすぎない。

文明戯の新聞広告

出発点は文明戯「ハムレット〔竊国賊〕」だ。『申報』と『民国日報』の一部広告を調べた。

『申報』には文明戯「竊国賊」の広告が複数回掲載されている。こちらは影印本で確認できる。広告があるというもうひとつの『民国日報』については謎だ。汪義群、曹樹鈞+孫福良、王建開、郝嵐、張治たちはそろって該広告が『民国日報』に掲載されたと記述している。しかし彼らが明記した日付の該紙上に「竊国賊」の広告を見つけることができない。奇妙な結末だった(後述)^{*2}。

そこで本稿だ。文明戯「ハムレット」の前後に出された広告を見る。

劇団、あるいは劇場側は新聞に広告を掲載し莎劇だと宣伝している。くり返すが莎劇のようであって実はそうではないのが文明戯シェイクスピアだ。

郝嵐「林紓与“娛樂化”的莎士比亚」(2005)がいくつかの作品を掲げている。『申報』の広告を紹介する前におおよそを知るためにそこから引用して以下のとおり。()は筆者の注。原題を日本語で示す。

1913年 鄭正秋の「肉券(ヴェニスの商人)」
1916年まで 「竊国賊(ハムレット)」、
包天笑編訳「女律師(ヴェニスの商人)」、
「黒將軍(オセロ)」、「姉妹皇帝(リア王)」、
「新南北和(マクベス)」

上演されたときの題名を並べただけ。具体的な説明はない。ひとこと述べれば、包天笑「女

律師」を上演したのは女子学生だ。職業演劇の文明戯には入らない。

同じく郝嵐の「莎士比亚在1916年前的中国」(2008)^{*3}によると文明戯については次のとおり。少し詳しい。

1913年7月に鄭正秋が新民社「肉券(ヴェニスの商人)」を上演した。12月9-23日は呉我尊らが長沙寿春園で「馴悍(じゃじゃ馬馴らし)」などを上演。1914年に新劇同志会が「女律師」を、陸鏡若の春柳劇場が「鑄情(ロミオとジュリエット)」「馴悍記」「倭塞羅(オセロ)」などを上演。1915年旧暦五月十二日(6.24)には民鳴社が「借債割肉(ヴェニスの商人)」を上演した。1916年に上演最多の文明戯莎劇は「ヴェニスの商人」で5劇団が、次は「馴悍」「鑄情」でともに2回という。「ハムレット」は1916年に徐半梅の笑舞台「韓姆列王子」、導社「篡位盜嫂」(原名「乱世姦雄」)、鄭正秋の葉風新劇「竊国賊」がある。ほかは同年5月に笑舞台「女律師」、7月「黒將軍(オセロ)」となる。

こちらには包天笑「女律師」を掲げない。

以下は重複する部分もあるが前出孟憲強による。

「黒將軍」は1916年7月に笑舞台^{*4}で公演された(459頁)。「姐妹皇帝(リア王)」は作品名「口孝与心孝」で掲げられる(140頁)。

同一作品に複数の文明戯題名がある。上演した劇団が異なるからだろうか。また同頁に「新南北和(マクベス)」として「巫禍」あるいは「竊国賊」を出す。「竊国賊」は「ハムレット」だから孟憲強の勘違い、あるいは間違っただけを引用した。「竊国賊」を「マクベス」とする誤りが今でも拡散しているのが現状だ。文明戯の内容そのものが不明だから題名を取り違えることも生じるのだろうか。

『申報』広告の莎劇

『申報』の広告を見ると「竊国賊」以外にも

莎劇と称する作品がいくつか上演されている。以下にそれらを簡単に紹介する。1916年の文明戯「竊国賊」前後に公演されたものに限って広告の実例をいくつか示す。文明戯シェイクスピア全般については巻末の「文明戯シェイクスピア一覧」を参照のこと。

本稿で掲げるのは関係部分の見出しを中心にした広告文だ。説明するために掲載日順に a b c を振る。

広告に共通して大きく掲げているのは「沙翁劇」「莎士比亞名著」という表現だ。莎氏の原作であることを強調する。しかし、それらが林訳『吟辺燕語』を底本に使用していることは間違いない。新聞広告の一部ではそれを明らかにした⁴⁵。題名が共通するところからも林訳の存在がわかる。当時、中国では莎劇の漢訳はまだ刊行されていない。前述のとおり莎劇原文にもとづいた中国最初の単行本は田漢漢訳『哈孟雷特(ハムレット)』だ。1922年の出版である。それ以前は莎劇関連でまとまったものといえばラム本の漢訳である『解外奇譚』(1903)『吟辺燕語』(1904)しかなかった。



a 1916年1月20日(民国四年旧曆十二月十六日)

民鳴社 注意/沙翁劇/出現 「十六夜演洋装劇一/獄配」「十七夜演洋装劇二/医諧」

特大で「注意/沙翁劇/出現」と掲示する。莎劇であることをそれほど強調したかった。

広告の説明文冒頭は大活字で「この人こそが劇作家の祖先である[此老却是劇本家的老祖宗]」と打ちあげる。莎氏を指して「英国の名前を知られた詩人のシェイクスピア[英国鼎鼎大名之詩家莎士比亞]」だと説明した。

漢語の「詩家」は日本語の「詩人」である。莎劇は詩だからそれで間違いない。日本語の「劇作家」、広告の漢語「劇本家」と内容は同じだ。莎氏の時代には彼を指して「詩人」と呼んだ。「劇作家」ではないところに注目してほしい。文明戯の関係者も林紘と同様にほぼそれを受け継いでいる。詩人と劇作家を区別する現在の見方を当てはめることはできない。

それにしても上の広告にはラム姉弟も林訳『吟辺燕語』も提示しない。莎氏を直接持ち出す神経が太い。もっとも一部の広告で示しているといってもせいぜいが『吟辺燕語』どまりだ。その著者がラム(蘭姆)であるところまでは明らかにしていない。明記する必要を認めなかったのか。莎氏の名前だけで十分だという判断が働いたのかもしれない。それくらい厚顔でなければ中国では演劇人として通用しないのだろう。

旧曆十六日夜に上演する「獄配」は、莎劇でいえば MEASURE FOR MEASURE (尺には尺を)である。『吟辺燕語』所収の題名と同じ。新聞掲載の当日に上演したとわかる。

翌旧曆十七日夜に予定している「医諧」も同じく『吟辺燕語』にある ALL'S WELL THAT ENDS WELL (終わりよければすべてよし)だ。

ふたつの文明戯を紹介して次のように述べる箇所は興味深い。

「獄配」は我が国の人々の家族制度についての観念を改良することを促進するだろう
 [獄配可以促进吾国人改良家族制度之観念]
 「医諧」は我が国の人々の婚姻階級につて

の思想を打破するだろう [医諧可以破除吾
国人婚媾階級之思想]

劇団が出した新聞広告だ。そこには主催者の
思考が反映されていると考えていい。文面を見
るかぎりいずれも社会改革、つまり人々の考え
を変える効用を期待していることがわかる。演
劇を演劇として楽しむという姿勢ではない。文
明劇の劇団の中には、政治宣伝のために演劇を
していた人がいたと知られている。新民、民鳴、
啓民、開明、民興などの劇団名を見れば大体の
傾向が予想される。上の例もその中に入れるこ
とができるだろう。

広告は以前に上演された莎劇としてつぎの3
作をいう。すなわち、「肉券」THE MERCHANT
OF VENICE (ヴェニス商人)、「馴悍」
THE TAMING OF THE SHREW (じゃじゃ馬
馴らし) および「冤乎」MUCH ADO ABOUT
NOTHING (から騒ぎ [驥36]。記号は本稿巻
末一覽)である。

「肉券」は鄭正秋が脚本化して公演したのは
1913年7月だ。そう孟憲強は書いている(139
頁。458頁では3月)。「馴悍」も同年12月、呉
我尊らによって長沙で上演された(458頁)。
1916年から見れば3年前のことだ。「冤乎」の
上演については不明。

最後に今後の予定に触れているのが興味深い。

シェイクスピアの著名な悲劇「鬼詔」と
「鑄情」の2作はすでに脚本作りと演出を
進めている [莎翁之著名悲劇(鬼詔)(鑄
情)二劇亦已從事編排]

一見して上の文句は奇妙だとわかる。なぜな
ら莎劇そのものを使用するのであれば「脚本作
り」をする必要はない。しいて言えば英文原本
から漢訳しているというくらいの表現になるは
ずだ。ここから文明戯の裏事情が透けて見え
る。すなわち題名からして林訳を利用していること

を示す。この2作品ともに林訳『吟辺燕語』の
題名そのままなのだ。「鬼詔」HAMLET (ハム
レット)と「鑄情」ROMEO AND JULIET
(ロミオとジュリエット)にほかならない。

それらをもとにして脚本をあらたに作ってい
ることが明かだ。「鬼詔」は「竊国賊」と改
題され、この予告より約3ヵ月後に笑舞台で公
演が実現する。「鑄情」については後述。



b 1916年1月21日(民国四年旧曆十二月十七日)

民鳴社 十二月十七夜戲准演西裝新劇 注意
／沙翁劇／出現 「医諧」

前日に予告をしていた「医諧」が本日の公演
となった。新聞広告の文面は「獄配」をはずし
ただけ。「医諧」のみを前面に押し出す。「獄配」
は1夜だけの公演で終わった。当時は日替わり
の演目が普通だったという*6。好評であれば日
をあらためて上演する。そのくり返しらしい。
のちの「竊国賊(ハムレット)」もその類とわか
る。

これ以後、民鳴社という劇団名はしばらく消
える。かわって劇場笑舞台の新聞広告になる。

1916年に民鳴社は解散したと当事者は証言
している。朱双雲、汪優遊、徐半梅らが発起し
民鳴社の主要な俳優を集めた。劇団名はない。

劇場の笑舞台を借りたから笑舞台という。ただし役者は固定せず出入りが激しかった*7。

約2ヵ月の間をにおいてふたび莎氏の名前を掲げる作品が上演された。笑舞台である。



c 1916年3月17日(民国五年旧曆二月十四日)

笑舞台 准十四夜開幕／開演莎士比亞名著「假面具」

ここにある「假面具」広告は「莎士比亞名著」を強調している。莎氏の名作というのだが広告の内容説明*8を読んでも原作がなにか思いつかない。孟憲強によると「一報還一報」だという*9。

「一報還一報」は漢語の題名で中身は MEASURE FOR MEASURE (尺には尺を)だ。すると不思議なことになる。この「假面具」は1月に1夜だけ上演した「獄配」と同じだ。再度公演するに際して改題したのだろうか。では孟憲強はなぜ「獄配」との関係について説明しないのか。理由がわからない。

劇団が異なる、あるいはある程度の時間をおけば改題する可能性はあるかもしれない。民鳴

社から笑舞台への変更、また1月20日夜から3月17日夜という期間はその「ある程度」になるのか。しかし普通は告知するのではなからうかと疑いもする。題名は違うが内容がほぼ同じであれば観客もとまどうだろう。それとも題目を変えなければならないほどに内容も改変しているのだろうか。いくつもの疑問が生じる。そこを説明する研究者は見当たらない。

孟憲強(141頁)は鄭正秋『新劇考証百出』から上演された文明戯シェイクスピアを抽出している。ただし文明戯の題名と莎劇の原題を示しているだけ。『吟辺燕語』の記述からふたつを抜き出す。()内が莎劇の漢訳題名を示す。

《維也納大公》(《量罪記》)

《假面具》(《一報還一報》)

『吟辺燕語』は20種を収録する。孟憲強はそれに対応させたらしく20種の文明戯題目を掲げ、もとになった莎劇の題名を注記している(ように見える)。

上の2種を見るとおかしなことになる。「量罪記」と「一報還一報」はともに「尺には尺を」の漢訳題名だ。すると、同一作品が別名の文明戯になったことを示す。20種あるはずのものが19種にしからず1種が行方不明である。孟憲強はこれについて説明する必要があった。それが無い。先行する文献を単に集めただけで検討しなかったらしい。孟憲強が知らずに行方不明にした作品は「仙翁」A MIDSUMMER NIGHT'S DREAM(夏の夜の夢)である。文明戯「夏夜夢」だという。

巻末の「文明戯シェイクスピア一覧」をご覧ください。『吟辺燕語』の20作品が文明戯になったときどのような題名で上演されたかをまとめた。

林訳「獄配」は、文明戯での題名はほかに「假面具」「退位」「維也納大公」などがある。当時の文明戯関係者は題名を統一するのを感じ

じなかったらしい。



d 1916年3月21日(民国五年旧曆二月十八日)

笑舞台 特請新劇大家開演高尚新劇(役者名省略)十八夜准演雙齣好戲/「哀情新劇 禽海石」「莎士比亞名著 冤縁」

大きく「冤縁」と表示した上段に「莎士比亞名著」と掲げる。下段には劇の内容説明らしいものがある。冒頭を示すと次のとおり。「▲冤家变成親家 親家忽又变为冤家 而冤家卒成親家 其中曲折如何 請来一觀 便知端的」。仇敵が親戚になり、親戚が仇敵にまた変わる。ところがついには親戚になる。この説明から莎劇のどれに該当するのか理解できるのだろうか。ところが趙驥は論文36頁の注釈において「鑄情」だと根拠を示さずに指摘する。今、確認はできないが趙驥の記述に従う。そうすると1月20日に予告をしていた「鑄情(ロミオとジュリエット)」が「冤縁」という題名になったとわかる。ただし具体的にどのような脚本になったのかは不明のまま。誰も説明をしていない。文明戯については不思議なことが多い。専門家はどうか考えているのか知りたいところだ。



e 1916年4月23日(民国五年旧曆三月廿一日)

笑舞台 二十一日日戲正秋優遊登台准演/「莎士比亞名著 假面具」

前出cと同じ。新聞広告を示すだけで説明は省略する。



f 1916年4月27日(民国五年旧曆三月廿五日)

笑舞台 三月二十六日夜准演正秋新編名劇/「竊国賊」

雄侠「莎士比亞名著 殺滄」

別稿ですすでに紹介した。新聞広告を示すだけで説明は省略する。



g 1916年4月28日(民国五年旧曆三月廿六日)

笑舞台 編演(鄭正秋)主任/三月二十六日夜准演正秋新編名劇/「竊国賊」

別稿ですすでに紹介した。新聞広告を示すだけで説明は省略する。



h 1916年4月30日(民国五年旧曆三月廿八日)

笑舞台 廿八日優遊正秋登台演双齣好戲「雌

廣告の冒頭は大活字で「四喜之一」と示す。続けて「四悲四喜〇悲以竊国賊為首〇喜以殺滄為冠」だ。悲劇の最高が「竊国賊(ハムレット)」であることはわかる。だが、四大喜劇のひとつ「殺滄」が最高だといわれてもなにを指すのか思い当たらない。原作を特定するための材料が示されていないからだ。

ここでも趙驥36頁が原作を指摘して「馴悍」「馴悍記」という。THE TAMING OF THE SHREW(じゃじゃ馬馴らし)になる。しかし、上記のように新聞広告だけでは判断のしようがない。趙驥がなぜ「馴悍」だということのか根拠を示していないからには信じられない。好意的に見れば趙驥は特定するだけの資料を独自に入手したのかもしれないと思う。今、確認はできないがそれに従う。



i 1916年5月7日(民国五年旧曆四月初六日)

笑舞台 初陸日夜准演正秋先生新編莎翁名劇/「竊国賊」

こちらも紹介した。新聞広告を示すだけで説明は省略する。

台詞の一部

巻末の「文明戯シェイクスピア一覧」を作成して感じるところがある。それを少しのべる。

研究論文に先行文献を引用することは普通のことだ。ただしそのばあいは論文名を示す必要がある。それをしなければどうか。誰でもが知っている事実であればいちいち明示する必要はないという判断もありうる。しかし文明戯のような特別な研究分野で先行文献を明記しないのはいかがなものかと思う。せめて参照文献名くらいあげてもいいだろう。ところが中国の研究者の一部では典拠の明記が徹底していない。無断借用を当たり前のように考えているらしい。前述した例をもういちど示す。

文明戯「ハムレット [竊国賊]」の広告が『申報』(1916.4.27、28)にある。影印本で確認した。ところがそれよりも前の『民国日報』(1916.3.11)に掲載されていると書く論文があった。

最初に指摘したのは汪義群(1987)だ。するとそれに続いて曹樹鈞+孫福良(1989)、王建開(2005)、郝嵐(2008)、張治(2012)らが同じことを述べる。広告文までも抜き出す。先行文献名の明示がないから各人がそれぞれ新聞で調べたと思うだろう。ところが奇妙なことに私が調べた該当日付の『民国日報』には「竊国賊」の広告は掲載されていなかった。つまり新聞の日付について汪義群は誤記した。上記の研究者たちは誤記であることを知らずに引用し続けた。自分で調べれば該当号に「竊国賊」の広告が掲載されていないことがわかったはずだ。自分で確認をする手間をはぶいた。

私は『民国日報』を掲げた郝嵐に直接問い合わせた。『民国日報』の広告掲載は正確なのかと質問した。『申報』の広告写真を添付したのは私が別の資料を把握していることを示すためだ。単なる質問ではないことを普通の研究者ならば理解するだろう。

郝嵐は電子メールのあて先を変更していた。それが混乱の原因か。航空郵便を使用したりし

てやりとりに支障が生じた。それがわざわざいしたのか郝嵐の対応はちぐはぐだった。彼女はようやく探したと『申報』の紙面を添付ファイルで送ってきたのだ。私はすでにそれをメールに添付したではないか。しかも『民国日報』については回答がない。意思が疎通していないようだった。結果としてそうなったのか、わざとなのかは知らない。郝嵐は自分が書いた『民国日報』の該当号に関して沈黙した事実だけが残った。見ていないと判断せざるをえない。もとの文献を示さないこととあわせ、研究者としては杜撰な資料処理だと思う。

事実ひとつにしても確かめるためには困難がともなう。文明戯については研究上独特の困難があるらしい。

ごく大まかにいって文学作品には本文が残っている。戯劇であれば脚本がある。音楽ならば楽譜が存在するだろう。それらが研究するための基礎資料になる。しかし文明戯にはその根拠となる資料がほとんどないことを知った。

外部と内部に分ける。

外部とは文献資料で確認できることだ。『申報』影印本が刊行されてから資料として利用できるようになった。新聞広告のいくつかを見れば、上述のように文明戯シェイクスピアが公演された事実はわかる。研究者はそれを引いて報告している。外部はいくらか明らかにされつつある。

しかし内部、つまり戯曲の内容については詳細がわからない。いくつかの脚本は雑誌などに掲載された。しかし文明戯シェイクスピアの脚本はないらしい^{*10}。

鄭正秋ら当事者による説明は、林訳『吟辺燕語』にもとづいた粗筋にすぎない。具体的にどのような台詞だったのか、それは不明だ。演者による変更が上演のたびに発生したから台詞は残らなかった。あるいは最初から残す考えがなかった。それが文明戯の特色であり具体的な状況だったといわれればそうかもしれない。実際

に見た人の記録があれば参考資料になるだろう。だがそれを紹介する先行文献を見ない。私も一応はさがした^{*11}。ひとつだけそれらしい台詞、それもごく一部を見つけたので紹介する。

「ヴェニス商人」においてシャイロックが「肉1ポンドを切り取らせろ」というあの有名な箇所だ。

参考までに基本となる莎劇の台詞とその坪内逍遙訳(もとから改行なし。ルビ省略)を掲げる。

【莎劇】 Go with me to a notary, seal me there
Your single bond; and in a merry sport,
If you repay me not on such a day,
In such a place, such sum or sums as are
Express'd in the condition, let the forfeit
Be nominated for an equal pound
Of your fair flesh, to be cut off and taken
In what part of your body pleaseth me.

【坪内逍遙訳】 わしと一しよに登記所へござらっしゃい、あそこで、貴下の一判で可い、証書に御捺印なさい。それから、ほんの戯談に、かういふことを約束しておきませう、万一、貴下が云々の日限までに、云々の場所に於て、証書面の金額を御返済なさらんやうな場合には、其科料として、貴下さんのそのお肉を、ちょうど一ポンドだけ、貴下のお肉体の何物からでもわしの好く処から切取っても、異議はないといふことを。(2002. 396頁。莎劇原文も同左)

シャイロックの短い有名な台詞だ。私が見て要点はみつがある。ひとつ目は、証書に署名をすること。ふたつ目は、いかにも冗談めかしている箇所。みつ目は、彼が望む箇所の肉1ポンドを切り取るということ。

署名をして契約を結ぶのが重要だとすぐに理解できる。結んだ契約は動かすことができない。

冗談だといっているからまさか実行するとは思わないように見せかける。しかし契約は契約だ。好きな部位の肉1ポンドを切り取ることに違いはない。肉1ポンドは約450グラムだ。量としてはかなり大きい。シャイロックは1ポンドの肉を切り取るにより合法的に宿敵アントーニオを殺す考えだとわかる。

この3点をラム本はつぎのように小説化した。

【ラム】 only Antonio should go with him to a lawyer, and there sign in merry sport a bond, that if he did not repay the money by a certain day, he would forfeit a pound of flesh to be cut off from any part of his body that Shylock pleased.

【野上弥生子訳】 ただアントーニオが自分と一緒に弁護士のところへ行つて、もし約束の日に金が支払へない時には、彼の身体からどこでもシャイロックの望み次第のところを切り取つて、一ポンドの肉を提供すると云ふことを、借用証書に冗談半分に署名して貰ひたいと申しました。(岩波文庫1952. 144頁)

ラム本はシャイロックの台詞を地の文章に書き換えている。だからラムは莎劇にはない「Antonio」を補足し、また「you」を「he」に、同じく「me」を「Shylock」に置き換えた。これが小説化ということだ。ただし、要点ははずしていない。

借用証書を作成する。冗談半分に署名する。(シャイロックの好きな部位の)アントーニオの肉1ポンドを切り取る。3要点のすべてがある。

ラム本は莎劇の台詞、たとえば“in a merry sport [冗談で]”などをほぼそのまま使いながら原意を伝えているといふことができる。

林紓らはラムの文章を次のように漢訳した。

【林訳「肉券」】歇洛克復笑曰。我必假金。然必同赴律師定約。果如期而金不完者為約爽。請剗先生肉一磅為償。此戲約也。先生其哂笑而從我耶。2頁

シャイロックはにやりと笑って言った。「金は必ずご用立てします。ただし弁護士のところへ一緒に行つて契約を結ばなくてはなりません。もし約束の日に金が支払えないならば違約となります。賠償としてあなたさまの肉1ポンドを抉りださせてください。これは冗談ですよ。あなたさまは笑つて従われるのじゃないですかね」

林紓は契約[約]、冗談[戯]、肉切り[剗肉]1ポンドという3要点のひとつも逃がしてはいない。魏易が口訳しているから当然、直訳にはならないが原文の意味するところは押さえている。しかも、莎劇とおなじくシャイロックの台詞にしているからラム本よりも適切だということもできる。

林訳が漢訳題名を「肉券」にしたのは、肉の契約[券]に焦点をあわせたからだ。

林訳「肉券」にもとづいて脚本を作ったのが文明戯「肉券」である。題名を同じにして林訳に基づいていることを隠さない。

公演回数が多い。人気があったということだ。そのなかの1回は1914年5月5日に举行された六劇団合同公演だった(参照:文明戯シェイクスピア一覽)。その観劇評がある。林訳の小説をどのような台詞に書き換えたのか。興味深い。

「薄情な小人(注:笑吾の扮するシャイロック[薛禄克])を描写して行き届いている」と笑吾の演技を賞賛する。続いては台詞の引用だ。

署券時言:“割肉事, 不過頑笑而已, 如果逾期不償, 難道定要割肉不成?” 此語補來極佳。蓋當時薛雖存心復仇, 口中必有此等言語也; *12

契約に署名するときに言う。「肉を切り取る[割肉]なんてのは冗談[頑笑]にすぎません。もし期限をすぎて返せないとなつても、まさか本当に肉を切り取るとでも?」この言葉の補足はきわめてうまい。当時、シャイロックは復讐する下心を持っていたとはいえ、口ではそのように言う必要があったからだ。

この台詞は執筆者の義華が記憶にもとづいて大意を残したものか。あるいは実際に発言されたそのままを書きとめたようにも見える。台本が残っていないからわからない。断片であるのが残念だ。上の記録を見れば、肉は出てくるが1ポンドが消失している。実際の台詞になつたのか、あるいは1ポンドという表現は義華にとっては重要ではなかつたから記憶に残らなかつたこともありうる。

義華の説明で私がおもしろく感じるのは、「まさか本当に肉を切り取るとでも?」という箇所を補足だととらえていることだ。「補足」と説明している箇所に手がかりがある。つまり文明戯「肉券」がもとづいた林訳『吟辺燕語』の「肉券」にはその反語部分がもともと存在していないことを義華は知っていた。だから「補足」と説明した。たしかに義華の書くとおりで。林訳「肉券」では「これは冗談ですよ。あなたさまは笑つて従われるのじゃないですかね」とあった。文明戯では冗談を軸にして表現を変えた。「まさか生身の人間から肉を切り取ることなどありえない」と補足したほうが観客にとっては理解しやすいものになる。莎劇はもとよりラム本にもない表現だ。文明戯では以上のように書き換え補足した実例である。

文明戯の台詞といつても上のようにごく一部分しか残っていない。逆にいえばこれだけ具体的な台詞の記録は珍しい。もっとも、探せば出てくる可能性はあるだろう。

見ればわかる。文明戯は実物の莎劇ではない。

ラム本を底本にした林訳『吟辺燕語』を使用した文明戯「肉券」だ。ト書きと台詞の一部を見れば、契約、冗談、肉切りは備わっている。ただ1ポンドが見えない。この部分の大筋は一致しているといえるだけ。当時の観客を視野に入れて台詞の書き換え、補足が確かにある。ただし、ほかの場面がどうであったかまではわからない。

公演そのものに対する義華の評価は非常に高い。それとは別に、細部が異なるのだから「莎劇のようなもの」とならざるをえないのも当然だろう。

㊦

【注】

- 1) 孟憲強『中国莎学簡史』长春・東北師範大学出版社1994.8. 11頁で「竊国賊」は「麥克白(マクベス)」にもとづいて改編すると誤る。139頁でも同様に誤る。
- 2) 神田一三「文明戯「ハムレット」と『民国日報』の広告『清末小説から』第129号 2018.4.1
- 3) 郝嵐「莎士比亚在1916年前的中国」『清末小説から』第91号 2008.10.1
- 4) 黄愛華「上海笑舞台の変遷及演劇活動考論」袁国興『清末民初新潮演劇研究』広州・広東人民出版社2011.1
- 5) 瀬戸宏『中国のシェイクスピア』松本工房 2016.2.29. 76頁に『申報』1914.4.5広告を翻訳引用している。84頁注22の原文は次のとおり。
「女律師取材於吟辺燕語内肉券一則為英国莎翁最有價值之作」。同じ引用は次にもある。劉寧寧『莎士比亚在上海(1949年前)——以《申報》為中心』(上海・華東師範大学碩士學位論文2016.5.17) 38頁。また、趙驥「鄭正秋對於莎士比亚演劇之貢獻」(『雲南藝術学院学报』2016年第3期 2016.9.25) 35頁も同様。同じく趙驥37頁に次の広告が引用してある。「竊国賊」について『申報』丙辰八月初六日(1916.9.3)の民鳴社広告という。「取材於商務印書館出版之《吟辺燕語》中《鬼詔》一節」
- 6) 松浦恆雄「文明戯の実像——中国演劇における近代の自覚」『中国における都市型知識人の諸相——近世・近代知識階層の観念と生活空間』大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター 2005.3.31. 240頁
- 7) 欧陽予倩「談文明戯」『中国話劇運動五十年史料集 第一輯』北京・中国戲劇出版社1958.2. 87頁。徐半梅は7人の同志(のち9人に増加)を集めたと書いている。『話劇創始期回憶録』北京・中国戲劇出版社1957.7. 87頁。ただし、『申報』1917年1月4日までの民鳴社広告が記録されている。瀬戸宏『民鳴社上演目一覧』翠書房2003.2.28を参照。黄愛華307頁は「到1917年1月民鳴遊藝社解散」と書く。
- 8) 「假面具一劇○為莎翁生平第一傑作○其中写一勢利朋友○為了娶老婆○假仁口義○做好做歹○等到老婆到手○老婆的裙帶錢用完○則又千方百計○与之離婚○一而又与富有金錢的寡婦○鬼迷鬼眼○又要同他結婚○幸而這位寡婦奶奶○洞燭其奸○不為所惑」
- 9) 「《假面具》(《一報還一報》)」141頁。
「(1917年)2月14日,笑舞台公演根據《一報還一報》改編的《假面具》」459頁
- 10) 包天笑改編「女律師(ヴェニスの商人)」(『女学生』第2期1911.未見)がある。林訳『吟辺燕語』にもとづいて脚本化した(瀬戸宏『中国のシェイクスピア』73-75頁)。ただし女子学生が公演したもの。これを職業演劇である文明戯に含めることは不適当だ。
- 11) 次を参照した。倪百賢、王潮鳳編「《申報》戯曲文章索引」『上海戯曲史料薈萃』総4期 上海藝術研究所1987.9.20。趙海霞『近代報刊劇評研究(1872-1919)』濟南・齊魯書社2017.10
- 12) 義華「六大劇団聯合演劇之品評」『新劇雜誌』第2期1914初出未見、傅謹主編『中国話劇百年典藏 理論卷1(1906-1929)』北京・人民文学出版社2017.4. 92頁

自爆する日中の研究者たち 2 ——清末小説と林訳をめぐる

樽本照雄

前稿を補足することから始める。

郭浩帆『近代報刊視野下中国小説転型研究』(北京・科学出版社2018.4)が出た。郭浩帆は独自に小説数を集計し「表1-1 中国近代小説発表簡況表(1840-1919)」(3頁)を作成している。そこから1900-11年に発表された小説数を抽出する。創作作品1,710件、翻訳作品1,014件。その割りあいには翻訳が全体の37%を占めるのみ。ここでも阿英説は否定されるのである。

劉鉄雲「老残遊記」の新聞掲載年

阿英がある断定をしたために「老残遊記」についての謎が発生した。直面した研究者たちはその謎に頭をかかえた。阿英説を基本に置くと問題解決の目途がまったく立たなかったのだ。解決できない問題は多くは放置される。そうせざるをえない。だから関係論文が発表されることはなかった。

劉鉄雲「老残遊記」についてはいくつかの不明な点が存在していた。不明なままでは沈黙するだろう。あるいは中国学界は作品について論じることの方を重要視する。ゆえに基礎的な事実の究明は脇に置かれる。

「老残遊記」をめぐる複数の謎がからみあって出現した。

謎が発生するひとつの原因は「老残遊記」の

執筆過程に不明確な部分があったからだ。確認できないといっても同じ。その基礎的な箇所でも阿英の断言が原因となり問題が解決できなくなった。

また該作品を掲載した『繡像小説』にも発行遅延問題のうちに発見されている(後述)。生前の阿英はこの発行遅延問題があることをまったく予想していなかった。1980年代にこれを指摘した研究者張純は鋭い。しかし、学界は長らく無視した。それが事実だ。その根底には阿英の断言があったからだと考えて間違いない。

さらには「老残遊記」と同じく該誌に連載されていた「文明小史」との間に盗用問題があることが明らかになっている。前述のとおり阿英は知っていたが詳細を説明しなかった。これに加えて『繡像小説』の主編は李伯元か否かという問題まで出現している。

狭い空間と長くもない時間の範囲内に関連する複数の問題事項が発生しているのは興味深い。簡単に説明したが、全部の謎が一度に露出したわけではない。ひとつの謎がしばらくしてつぎの謎の存在を明らかにする、というように長い時間がかかっている。

「老残遊記」の原稿執筆に関連して阿英が行なった決定的自爆について説明する。

問題を理解するために必要な基礎的経緯を簡単に述べる。

劉鉄雲「老残遊記」は、最初上海の商務印書館が刊行する『繡像小説』に連載された。主編の李伯元による「老残遊記」原稿第11回没書事件があり劉鉄雲は連載を中止した。原稿を商務印書館に仲介したのは前出「鄰女語」を『繡像小説』に連載していた憂患余生(連夢青)だ。のちに劉鉄雲は該作品を『天津日日新聞』に再掲載した。追加執筆して初集20回が完成する。その後おなじ『天津日日新聞』に「老残遊記」二集9回が連載された。そういう経過である。二集の『人間世』掲載(1934)と単行本(1935)、および外編については今は触れない。

重要なのは「老残遊記」には初集20回と二集9回があるということだ。初集を書いたあと二集が出てくるという当たり前の順序にすぎない。時間の前後に間違いはない。なにが謎かといえは劉鉄雲が書いた原稿だ。時間の順番に書かれたはずの原稿に阿英の説明を注入するとつじつまの合わない箇所が出てきた。整合性を確認することができない。研究者(劉鉄雲の孫)は悩んだ。

上の原稿執筆と公表の順序はそのままだが、年月が確定できるものとそうでないものが併存する。ここをあいまいにすると訳がわからなくなる。区別して説明する。

まず「老残遊記」が『繡像小説』に連載を開始したのは1903年で間違いはない。刊年を明示した雑誌の実物がある。その後『天津日日新聞』に再掲載したのは「1904年」であると阿英は説明した。ここが問題だ。カッコでくくったのはそれが証拠不十分、すなわち不確実だからである。阿英の記述があるだけ。新聞の実物で確認することができない。当時は誰もそれに気付かなかった。阿英の説明は正しいと研究者の全員が思い込んでいたのだ。

魏如晦(阿英)「關於『老残遊記』兩題」(『宇宙風乙刊』第31期 1940。今、「關於老残遊記二題」『小説二談』上海・古典文学出版社1958。61頁)には次のように記述されている。翻訳する必要はないだろう。「1904年」に注目してほしい。

刊載時期、在商務輟刊之翌年、即甲辰(一九〇四年)。

「老残遊記」の新聞掲載は、商務印書館の『繡像小説』が掲載中止をした翌年、すなわち「1904年」だ。そう阿英は断言する。そこには何の説明もない。根拠証拠も示さない。阿英の断定だけがある。

だれも疑わなかった。なぜなら阿英は『天津

日日新聞』連載の初集切抜き10回本を所有していた(現在の所在は不明)。その切抜き本には年月の記載があるのだろう。研究者は当然のようにそう推測したからだ。これが混乱の原因である。

1905年の劉鉄雲日記旧曆十月初三日付に「老残遊記」原稿第11回(本稿では巻は使用しない。以下同じ)を執筆したとある。阿英が初集の『天津日日新聞』掲載時期は「1904年」だと書いている。だから1905年の日記にあるこの「老残遊記」第11回は二集だ。その頃はそう考えるのが当たり前だった。

劉厚沢(劉鉄雲の孫)は鉄雲日記に不審な点があることに気づいた。「老残遊記」原稿第11回の翌初四日はほとんど第15回である。つづく初五日には第16回を書いている(魏紹昌編『老残遊記資料』北京・中華書局1962。94頁)。ここに疑問が出てくる。日記には記載のない二集原稿の第12-14回は、いつ書いたのか。説明できない。また、二集は1907年に発表されている(劉大紳説)が原稿執筆から新聞掲載までなぜ2年も間隔があいているのか。普通は執筆した直後に公表されるだろう。奇怪だ。

劉厚沢は兄の蕙孫に相談したが納得のいく結論を得ることができない。1962年に劉厚沢が疑問を提出公表して以来、誰も答えることができなかった。該書を編集した魏紹昌も初集の新聞掲載は阿英のいう「1904年」だと信じていた。魏紹昌も劉兄弟と同じく解答することができなかったのだ。だからこそ劉厚沢の疑問が『老残遊記資料』にそのまま掲載されている。

原稿執筆時期について討論した手紙がある(劉徳隆、朱禧編『也無風雨也無晴——滬榕書札』2008)。上海在住の劉厚沢が福州在住の蕙孫へあてたものだ。これを読めば疑問が生じる根底に阿英の断言した「1904年」説が横たわっていることがわかる。

劉厚沢は劉鉄雲日記にある二集の執筆過程に解明できない箇所があることに悩んだ。前述の

第12-14回原稿を執筆した記述がないことなどである。執筆順序に整合性がない。祖父劉鉄雲が誤記しているわけではないから日記表紙のつけ間違いではないかとも劉厚沢は考えた。阿英のいう初集新聞掲載の「1904年」は動かすことができないと信じている。ゆえに1905年の日記にある「老残遊記」は二集だと劉兄弟は固く思い込んでいる。阿英の発言は研究者からすればそれほど絶対的なものだった。

劉蕙孫、厚沢兄弟と魏紹昌の間に生じた不協和音について本稿では触れない。興味のある人は文書を探して読んでほしい。

そこにある文献をいくら吟味しても新しい展開は生まれえない。別の資料が必要だった。

問題解決の突破口となったのは、日本で私が発見した『天津日日新聞』切抜き本「老残遊記」二集9回である。切抜きにある月日の記載により1907年の連載であることが確認された。それに関しては劉鉄雲の息子大紳が書いていた説明が正しい。従来はただ並べていた事柄を確かな事実とそうでないものに分別する。私は頭の中で「老残遊記」の執筆経過を何度も追跡してみた。そこで阿英の「1904年」説に対する疑惑が生じた。

視角を変えることによって疑問は氷解した。日記に見える第11回は『繡像小説』で没書になった第11回原稿を復元したものである。そう考えれば問題がない。復元したというのが重要だ(汪家燊の項で後述)。初集原稿第12-14回はすでに雑誌に掲載されている。あらたに執筆する必要がない。だから、それをとばして翌日に初集第15回をあらたに書いたのは自然なことだった。

そもそも劉鉄雲日記にはどこにも「二集」の記述はないのだ。見れば「老残遊記」第11回とだけある。阿英の断言にもとづいて劉厚沢らはそれを「二集」だと思い込んだにすぎない。今から見れば完全な勘違いだ。

『繡像小説』連載が1903年にはじまり中断

する。1905年に没書原稿を復元して初集を『天津日日新聞』に連載する。その順序に矛盾はない。阿英のいう「1904年」の新聞掲載が間違いであることに気づく。

阿英による根拠のない断言が、問題の解決を阻害していた。劉蕙孫、厚沢兄弟をはじめとする研究者が解答することができなかった原因である。それくらい阿英の発言は信頼され影響力を持っていたという証拠にもなる。

劉蕙孫は、阿英説に対する絶対的な信頼をその後も持ち続けた。勘違いを堅持したといっても同じ。劉蕙孫『鉄雲先生年譜長編』(済南・齊魯書社1982)である。

前述のとおり『天津日日新聞』連載の切抜き本『老残遊記二集』を私が見つけたのは1976年のことだった。二集の新聞連載は「光緒三十三年七月初十日から十月六日」つまり1907年だと私は確認している。その複写を劉蕙孫に贈呈した。実物の複写だから1907年発表を理解されただろうと思った。

ところが後に刊行された彼の『鉄雲先生年譜長編』(133頁)を見て驚いた。二集の原稿執筆を1905年としたままだからである。ここは『老残遊記資料』の昔とかわらない。劉鉄雲日記の1905年執筆は二集についてのものだと確信して微動もしない。しかも、二集の新聞連載を1905年とする。なぜ1905年かといえば初集の新聞連載を阿英は1904年と説明したからだ。二集はそれにつづくから1905年になる。

劉蕙孫はあやしい文献操作を行なった。1905年の二集公表だと固く考えているからそれにあわせて新聞掲載年月日を「一九〇五年乙巳七月初一日」と改竄した。これを理解するのはむづかしい。劉蕙孫は二集の新聞連載が1907年であるとする外国人(樽本)の説明を信用する気にはならなかったらしい。しかも実物の複写を見ているにもかかわらずだ。目の前にある新聞の実物複写よりも阿英の根拠がなく誤った断言を信頼した。阿英からどうしても離脱すること

ができなかった。

劉兄弟にとっては阿英説を信じきったところからくる消極的自爆といっている。

『繡像小説』の停刊時期

阿英による証拠資料のない断言の別件は『繡像小説』の停刊時期である。

該誌は1903年に上海・商務印書館が半月刊で創刊した。梁啓超が亡命先の日本横浜で創刊した中国最初の小説専門雑誌『新小説』に続くものだ。著名な雑誌ではあるが全72冊を実物で所蔵する研究者はほとんどいなかった。阿英は所有していただろう。1例を阿英目録から引用する。

世界進化史 惺菴著。光緒甲辰（一九〇四）
繡像小説本。不完。75頁

阿英目録の特徴は雑誌掲載の作品を収録していることだ。上の例でいえば波線をほどこし「本」を使用して雑誌であることを示す。

それはいいのだが不足する箇所がある。阿英目録はすべての雑誌について期数を明示しない。「世界進化史」は第57-72期に掲載されている。私がなぜ期数を知っているかといえば、日本の故澤田瑞穂が所蔵していた雑誌の実物にもとづいて「繡像小説総目録」（1973）を編集したことがあるからだ。たぶん世界で最初の繡像小説目録だったと思う。『繡像小説』を収録する上海図書館編『中国近代期刊篇目彙録』（2）1900-03年分（上海人民出版社1979）よりも早かった。

『繡像小説』を含めた影印本シリーズが出版されるのは1980年になってからだ。一般に広く利用されるようになるのはこの影印本刊行後である。それ以前は研究者の誰もが『繡像小説』に言及するが誰も実物を見ていない状況が続いていた。

『繡像小説』の実物を見れば、第13期より最

後の第72期まで刊年を明示していないことがわかる。ゆえに上に示したように阿英が記述する「甲辰（一九〇四）」はありえない。事実にもとづかない記述だ。しかし、実物を見ないで阿英目録を利用するだけの研究者は「甲辰（一九〇四）」を信用するだろう。それしか頼るものはなかった。

阿英は最後の『繡像小説』第72期について1906年の李伯元死去による停刊だと1930年代から書いている。そうすると上の「甲辰（一九〇四）」とも矛盾する。誰も気づかなかった。

研究者が普通に使用するのは『晚清文藝報刊述略』（上海・古典文学出版社1958／北京・中華書局1959）だろうからそこから引用する。

『新小説』在日本発刊後、繼之而起的、有『繡像小説』。半月刊。李伯元主編。始刊于光緒癸卯（一九〇三）年五月，至丙午（一九〇六），因伯元逝世休刊，共行七十二期。17頁

癸卯年「五月」というのは旧暦だ。創刊号に「癸卯五月初一日」とあるのによる。そこまでは正しい。だが、つぎの「丙午（1906）に李伯元が逝去して休刊した〔至丙午（一九〇六）、因伯元逝世休刊〕」というのは根拠のない断定である。李伯元の逝去と『繡像小説』の推測された終刊時期が偶然に一致したのが断定の理由だろう。これも阿英の自爆だと判明している。畢樹棠が「繡像小説」（『文学』第5巻第1号1935）において停刊年は記載がないと指摘しているのは対照的だ。しかし、畢樹棠の説明は魏紹昌によって改竄され正しくは伝わらなかった（後述）。

1980年代に張純らが発行遅延説を提出して異議をとなえた。だが中国学界は無視した。長年にわたってこの阿英説の方が信じられてきたからだと推測される。『繡像小説』の停刊年について阿英に追隨し支持した研究者たちは消極

的自爆をしたことになる。

『中国近代小説編年』(上海・華東師範大学出版社2002)を編集した陳大康もそのなかのひとりである。『編年』はそのまま阿英説を遵守していた。その後、陳大康は『繡像小説』の刊行を新聞記事で追跡した。その文章で発行遅延を明らかにする。それを経て『中国近代小説編年史』全6冊(北京・人民文学出版社2014)によってようやく発行遅延を確定するという反応の鈍さを露呈している。しかもそれ止まり。李伯元の死後にも『繡像小説』が継続刊行されていた事実は考慮しない。つまり、李伯元の作品だといわれてきたことに疑惑が存在することを認めないのだ。

林紓批判

阿英目録については前述したとおり誤植程度のことでも混乱は発生する。学界全体が底揺れする。それだけ影響力が強かった証拠だ。

林訳『吟辺燕語』について阿英が行なった説明は、彼の問題意識に深刻な問題があることをあらわにした。

まず阿英目録からして書籍の記述を忠実に採録していないから重大である。引用する。

吟辺燕語 英^マ蘭^マ姆著。林紓 魏易合訳。光緒三〇年(一九〇四)商務印書館印。
124頁

『英国詩人吟辺燕語』とすべきところを簡略化して『吟辺燕語』としたのが問題ではない。

重要なのは原著者名が間違っていることだ。漢訳原本には蘭姆(ラム)の記載はない。「英国莎士比(シェイクスピア)著」としているのが事実だ。阿英目録は実物のままとを反映していない。誤記である。

ここは林訳批判の基本点だ。『吟辺燕語』にラム名がないからこそ文学革命派はそれだけを根拠にして林紓を批判した。莎劇を小説にかえ

て漢訳したと罵ったのだ。

翻訳の順序を示す。まず莎劇がある。それを小説化したのがラム本だ。小説になったラム本を底本にして林紓らは漢訳し『英国詩人吟辺燕語』と名付けた。「英国詩人」はシェイクスピアである。莎氏は詩人と呼ばれた。劇作家と称されるのはずっと後代になってからだ。「吟辺」は戯劇(戯曲でも同じ)、「燕語」は物語を意味する。翻訳すれば『シェイクスピア戯劇物語』となる。ラム本の原題名を直訳していることがわかる。

清末の翻訳界では原作者、重訳者、翻訳者などの名前を明示しないばあいもある。現在ほど厳密ではない。別にどうということはなく普通にあることだ(後述)。しかし林訳を批判する人たちは林紓がラムではなく莎氏の名前を提出したことを特別に問題視した。「莎士比著」とだけ記載したところに注目したわけだ。

文学革命派の王敬軒(錢玄同)と劉半農は、まさにそのラム名がないところをつかんだ。逆にいえばラム名がない箇所しか批判する材料がなかった。

林紓は莎劇を小説体にして翻訳した。彼は「豆と麦の区別もつかない(不辨菽麦)」。そう書いて痛罵した(「双簧戯」1918)。「戯曲と小説の区別がつかない論」の原型である。

錢玄同と劉半農は林訳の底本がラム本であることを知っていた。林序を読めば底本がラム本であることがわかる。莎劇とラム本を明確に区別している。林紓は戯曲と小説の区別をつけていた。また、批判される前の林紓は自分で戯曲も書いている。どこから「戯曲と小説の区別がつかない論」が出てくるのか。林紓にしてみれば不思議なことだったに違いない。だからといって林紓が反論することはなかった。

実をいうと問題は林紓を批判した錢玄同と劉半農の方にある。彼らは林紓が区別しているのを知っていて知らぬ顔をした。林訳の底本がラム本であるとはわざと指摘しなかった。指摘す

れば「区別がつかない論」は成立しなくなるからだ。

銭劉らが開始した林訳批判の根拠といえば、前述のとおり莎氏名を出したところに限られる。銭劉らは林訳の底本があたかも莎劇そのものであるかのような印象操作を行なった。林紓が「戯曲と小説の区別がつかない」ことに無理矢理してしまうことが必要だった。「区別がつかない論」はもともと虚偽である。ラム本を隠蔽して莎劇だと主張した銭劉にこそ「区別がつかない論」が当てはまる。

それに続くのが胡適（「建設的文学革命論」1918）であり鄭振鐸（「林琴南先生」1924）だ。彼らも戯曲と小説の区別をつけないまま林紓を批判した。

その経過を視野に入れると阿英目録の「蘭姆著」は異様に見える。阿英は『吟辺燕語』そのものに存在しないラム名を記入しているからだ。ラム名を出してしまうと林訳批判そのものが根底からくつがえる。あくまでも実物のままに莎士比著としなければならなかった。ラム名に触れることは林訳批判者がやってはならない種類のものだ。だから異様だという。

阿英の記述はまず目録作成の手順からいって間違っている。原本の記載を優先させるべきだ。あるがままの「英国莎士比著」とするのが原則である。どうしてもラムを表示したいというのなら注釈をほどこす。

実物にはない蘭姆だ。だが阿英目録だけを利用する研究者は、原本には蘭姆と表示されると誤解する。しかもラム本ならば「区別がつかない論」が成り立たないことに気づかない。これについて誰も発言していないから学界、あるいは研究者の怪異さが浮き出る。

『晩清文学叢鈔・域外文学訳文巻』に収録してこれも蘭姆と表示する。影響は小さくない。それに引きずられたのか後に商務印書館は該書を復刻してやはり蘭姆とする（1981、2013）。また、『中国近代文学大系』11集28巻翻訳文学

集三（上海書店1991）にも同様に蘭姆とある。劉永文編『晩清小説目録』（上海世紀出版股份有限公司、上海古籍出版社2008。375頁）もたぶん阿英目録をそのまま写して蘭姆著とする。いずれも実際の書物から離れている。

つぎに阿英が現物にはないラム著としたその背景を考える。

ラム名の記載がないからこそ林紓は文学革命派から「戯曲と小説の区別がつかない」と批判された。「区別がつかない論」が成り立つ唯一の根拠はまさにラム名の不記載だった。その重要箇所を阿英は無視してラム名を出した。阿英は『吟辺燕語』の底本がラム本であることを理解している。だからこそ蘭姆と書いた。ラム本を漢訳して小説になるのは当たり前だ。阿英目録の記述によれば林紓批判は成立しない。ならば阿英は事実にもとづいて銭劉胡鄭の林紓批判は間違っていると主張したか。林紓を擁護したか。それはない。

学界の反応が奇異だと私が感じるのはその点だ。『吟辺燕語』がラム本の翻訳である事実を知っている人たちは当時から存在した。林紓を批判した文学革命派の人たちも理解し把握していたのが事実だ。知っていながら意図的にそれを隠して林紓を非難した。だが林紓は反論しない。また同時に誰も文学革命派の間違いを指摘しない。林紓を擁護し彼の無実を主張し公表する人はいなかった。

吳宓が日記（1911）に『吟辺燕語』はラム本だろうと記述するがそれだけ。文章を書いて社会に向かって発言するわけではない。

また、東潤（朱世溱）「莎氏楽府談」（『太平洋』1917-1918）は林訳がラム本だと記述するだけ。それ以上の説明はない。林紓批判が発生したあとも無言のままだ。

林訳の底本がラム本というのは事実だ。しかしだいたい後になってからもあやふやな説明をする書物もある。林紓の弟子朱羲胄『春覚斎箸述記』（上海・世界書局（1930）影印本は奥付な

し。台湾影印本もある)は『吟辺燕語』について次のように説明している。書誌部分のみを引用する。

英国詩人吟辺燕語一卷 Tales from Shakespeare
英国莎士比亞 W. Shakespeare 原著。先生与魏易同訳。於清光緒三十年十月。初由商務印書館印行。或曰原著為却而司蘭 Charles Lamb 所著。題莎士比亞者。誤也。未究其詳。姑竝識之。32頁

「題莎士比亞者」は「莎士比」の誤記だ。莎氏とするのは林訳原本にそう書いてあるからかまわない。ただし、上の説明がわかりにくいのは「シェイクスピア物語 Tales from Shakespeare」と示していながら続けて原著はラム(蘭)かもしれないとあいまいに書くからだ。莎氏と表示するのは誤りだとしながらも結論がはっきりしない。

朱義胄は底本がラム本であることを確認しなかったように読める。なぜか。考えるに林紓批判が強固に継続されていたことが原因で朱義胄に迷いが生じたのだろう。林紓批判が渦巻く情況のなかで『吟辺燕語』はラム本の漢訳だから小説であるのは当然だ、と書くのは憚られた。朱義胄でさえ師匠の林紓を援護することができなかった。時代の圧力を感じる。

「晩清文学叢鈔」以後もラムと表示し続けている。だが誰もそれを理由にして林紓を擁護しなかった。林訳批判は微動だにしない。これこそ大いに奇怪である。

阿英は林訳の底本がラム本だと理解していた。このことは阿英のつぎの説明に関連している。

阿英「翻訳史話」(『小説四談』上海古籍出版社1981所収。呉泰昌、銭小雲編輯)だ。1938年の執筆らしい。掲載誌などの詳細は不明だ。

阿英は林紓+魏易合訳『吟辺燕語』を説明して「依拠したのもラム本である〔所依據的也是

蘭姆本〕」(243頁)とはっきり書いている。「也」を使用したのはその前に同じくラム本を漢訳した『海外奇譚』(阿英目録138頁は『海外奇談』と誤記する)を紹介しているからだ。それと同様に林訳もラム本の翻訳であると説明して正しい。それは阿英が林訳序を部分引用してその中に「莎士比亞筆記」「沙[莎]詩之紀事」があることから理解できる。そのふたつともに『シェイクスピア物語』を意味しているからだ。阿英は林訳の文意を明確に理解している。だからこそラム本に依拠したと明記した。そのことが後に阿英目録の原著者を蘭姆としたことと直接結びつく。自然な流れだ。

周知のとおり莎劇を小説化したのはラム姉弟だ。『シェイクスピア物語 TALES FROM SHAKESPEARE』(1807)である。林訳を読めば彼らが底本にしたのはラム『シェイクスピア物語』であり莎劇とは明確に区別していたことがわかる。共訳者の魏易から説明があっただろう。だから林紓は莎劇とラム本を書き分けている(後述)。

蘭姆と示したその時点で「区別がつかない論」は成立しないと阿英は書くべきだった。別の言い方をすれば、事実にもとづき立論する研究者ならば、林紓は「戯曲を小説化しなかった」から銭劉胡鄭らの林訳批判は誤りであると指摘するのが普通ではないか。ところが、阿英は違った。林紓を弁護擁護しない。劉半農らの林訳批判は正しくないと言及しない。その逆で林紓に対してまことに奇妙な説明を展開する。次の箇所を見てほしい。

しかし原本が『シェイクスピア物語』だと誤解し、これは達文本が「絶世の名優」としたのに匹敵する。だが、この責任は魏易にあり、林氏はもとより知ることはできなかった。

但誤原本為《沙氏筆記》，与達文本之《絶世名優》，可為匹对，不過，此責任在

魏易, 林氏初不能知也。244頁

莎氏が俳優をしていた事実を阿英は知らないらしい。だから達文本が誤った説明をしたと阿英は判断した。その否定の流れの中に出てくる「原本が『シェイクスピア物語』だと誤解し[誤原本為《沙氏筆記》]」である。

この記述については説明が必要だ。

問題は「原本」である。「原本」を底本だと考えれば、林訳の「底本が『シェイクスピア物語』だ」となる。ここの部分だけは正しいように見える。だがそうすると「誤原本為」部分の「誤[誤解し]」とつながらない。これがつながるように理解するためにあの「戯曲と小説の区別がつかない論」が適用される。阿英のいう「原本」とは莎劇そのものを指す。林紓は「戯曲と小説の区別がつかない」のだから、ラムの小説本を見てそれが莎劇そのものだと「誤解した。そういう阿英の説明である。

それにしても、林紓は『シェイクスピア物語』が莎劇そのものだと誤解していた、と書くのは不可解すぎる。阿英の説明にしたがえば「シェイクスピア作『シェイクスピア物語』」とならざるをえない。莎氏が小説を書いたことになる。こうなると阿英のほうが「戯曲と小説の区別がつかない」といわれてもしかたがない。

阿英説の影響力は強力で広範囲だ。台湾の李爽学が「莎士比亞入華記」(『中外文学関係論稿』台湾・聯経出版事業股份有限公司2015。228-229頁)において次のように説明する。

「林(紓)氏は前よりもいっそうひどくなり『吟辺燕語』と題してシェイクスピアの「原著」だと誤解した[林氏抑且変本加厲, 誤題《吟辺燕語》為莎士比亞「原著」]」

補足するとここで「前よりも」というのは『解外奇譚』を指しているからだ。台湾でもいまだに阿英流の林紓批判は継続されている。

阿英はなぜこのような無理筋で奇怪かつありえない記述をしたのか。

それは林紓批判という結論が阿英の脳内にあらかじめ確立していたからだ。そうとしか考えようがない。なんどもくり返すが林紓がラム本を漢訳したのであれば小説になるのは当然ではないか。それを知れば普通は林紓を批判した劉半農たちの方が間違っていると書くだろう。だが、阿英にはその考えが最初からない。林紓批判だけがある。立論の矛盾など気にしない。林紓批判をするためには林紓が「戯曲と小説の区別がつかない」ことにしなければならなかった。虚偽の上に成り立つ林訳批判を実行した文学革命派と同じ立場にある。同じ思考法を共有している。保守派の代表者林紓を弁護するなど、阿英にとっては言語道断なことだ。林紓批判という結論が先に決められている。そうなるようにすべてを構成するのが阿英を含めた文学革命派の方法である(後述)。

阿英の「原本が『シェイクスピア物語』だと誤解し」という記述は、事実を無視した自爆そのものである。銭玄同と劉半農、胡適、鄭振鐸に連なる。こうして林訳を批判する自爆人脈の基本隊列が形成される。

清末小説研究、あるいは学界の権威である阿英によって下されたこの判定は重く受けとめられた。林訳『吟辺燕語』について後の復刻本にいくら蘭姆(ラム)著と表示してあっても誰も林訳批判の矛盾に気づかなかった。阿英の果たした負の役割は大きい。

阿英については清末小説研究の先行者として私は尊敬し信頼していた。ところが彼によるいくつもの断定が研究の進展を阻害した原因であったとは、正直なところ想像もしていなかった。中国学界で清末小説研究の第一人者は阿英だったのだ。裏切られた思いがする。私の落胆の度合いが深い理由である。

2 魏紹昌のばあい

魏紹昌(1922-2000)は清末小説研究に対し

て大きな貢献をした。清末だけで4作家の資料集を編集刊行している。『老残遊記資料』(北京・中華書局1962)、『孽海花資料』(北京・中華書局1962。増訂本 上海古籍出版社1982)、『吳趸人研究資料』(上海古籍出版社1980)、『李伯元研究資料』(上海古籍出版社1980)である。「文化大革命」前に刊行された『老残遊記資料』が再版されないのは劉蕙孫、厚沢兄弟との確執があったからだろう。だから別に劉徳隆、朱禧、劉徳平編『劉鶚及老残遊記資料』(成都・四川人民出版社1985)が出版されている。

魏紹昌が書いた多くの論文のなかで注目されるのは「李伯元と劉鉄雲的一段文字案」(『光明日報』1961.3.25)だ。複数の論文集にも収録されている。「文化大革命」以前に発表された。劉蕙孫、厚沢兄弟と『老残遊記資料』を共同で編集していたころの論文だ。

魏紹昌は李伯元「文明小史」と劉鉄雲「老残遊記」の盗用関係について提起した。ただし、盗用を示唆した文章はすでに発表されている。1955年の『文明小史』だ。阿英のところで述べたように「盗用」という言葉は使っていない。だが両作品間の盗用の事実は知っていた。李伯元と劉鉄雲は「北拳南革」を批判して同じ認識を有していたと説明したのだ。認識を同じくしていただければ「文明小史」から該当箇所を削除する必要はない。「北拳南革」が阿英の愛国民族主義に合致しなかったと同時に盗用関係を知っていたからこそ削除したと考える。

魏紹昌の問題のひとつは、先行文献として阿英を紹介すべきだったこと。もうひとつ、魏紹昌は当時『老残遊記資料』を編集していたのだから劉蕙孫、厚沢兄弟と情報を共有すべきだった。そうすれば盗用問題が該資料集に反映されていただろう。だが、それをしなかった。どうやら彼らの人間関係は壊れていたらしい(参照:『也無風雨也無晴——滬榕書札』2008)。

魏紹昌は上の論文で李伯元と劉鉄雲の盗用問

題を指摘した。同時に自分では解決できない3疑問を提示している。

簡単にのべる。

1 李伯元は没書にした劉鉄雲原稿第11回をのちになぜ再利用したのか、

2 劉鉄雲はなぜ李伯元に抗議しなかったのか、

3 読者はなぜ盗用の事実を知らなかったのか。

たしかに魏紹昌の提出した3疑問に答える研究者はいなかった。あとで『繡像小説』主編問題に関して汪家熔が再度提起する。興味深い(後述)。

魏紹昌が犯した重大問題は、『繡像小説』に関する畢樹棠の文章を勝手に書き換えたことだ。

畢樹棠「繡像小説」は初出が『文学』第5巻第1号(1935)だった。魏紹昌編『李伯元研究資料』に収録したとき『文学』の発行を「1935年9月」と誤る。ここは小さな誤りにすぎない。

しかし、つぎの例は基本的に異なる。『繡像小説』の停刊時期に関する重要な箇所である。以下に初出と魏紹昌の書き換えを対照させる。

『文学』初出 停刊年月不明、約在光緒三十二年之間 270頁
魏紹昌編所収 停刊於光緒三十二年(丙午)三月 462頁

畢樹棠は『繡像小説』第72期の停刊年月について説明している。「不明」だと明記しているのを見てほしい。予測して光緒三十二年と三十三年の間だという。これが正しい。なぜなら該誌には発行年月の記載がないからだ。畢樹棠は実物を見て書いていることが理解できる。

ところが魏紹昌はその部分を無断で「光緒三十二年(丙午)三月」に書き換えた。停刊の年月は阿英がすでに確定していると信じていたのだろう。根拠のない思い込みにすぎない。改竄

することが研究上に親切だと考えたものか。しかし、原文を尊重しないところは阿英のばあいと同じだ。それは研究者、編集者がやってはならない反則行為である。阿英説を取り入れてどうしても「光緒三十二年（丙午）三月」だと説明したいのであれば、原文のままに引用してその箇所に注をつけるべきだった。

上の書き換えは研究者として致命的な誤りだといわざるをえない。

その悪影響がひとつの論文に出現した。王文君「再議《繡像小説》的停刊時間——讀《申報》刊《繡像小説》廣告札記」（『中国海洋大学学报（社会科学版）』2016年第2期）だ。王文君は畢樹棠の論文を紹介したが、それは魏紹昌によって改竄されたものだった。王文君は魏紹昌に騙されたということも可能だ。しかし初出雑誌で確認しなかった王文君の初歩的な間違いである。1980年の刊行物が36年後の若い研究者を陥れて犠牲者にしてしまった。

魏紹昌のばあいは意図的なものだから積極的自爆である。王文君は魏紹昌を信用し結果として騙された。消極的自爆になる。

阿英、魏紹昌にひきずられたといえれば王燕もその仲間だといえる。

王燕は以前その著書『晚清小説期刊史論』（長春・吉林人民出版社2002）において『繡像小説』発行遅延説に言及したことがある。その結論はあいまいだった。阿英、張純、樽本の3説があることを明記するところはいい。だが、発行遅延があったとしても無視してもいいような書き方をした。李伯元の死去と作品の継続発表については考えることがなかったといわざるをえない。

あれから13年が経過した。王燕「李伯元与《繡像小説》研究」（『文学与文化』2015年第2期）にはもともと認めるのに消極的だった発行遅延説は姿を消している。李伯元が死去して『繡像小説』は1906年4月に第72期を出して停刊したと書く。

新聞広告などの参照資料が増え研究者たちが努力した結果『繡像小説』の発行遅延は確定している。時間が経過すれば研究者の立論は進化するものだと思っていた。ところが王燕のばあいは『繡像小説』について目の前の事実を認識することができない。大昔の阿英説に退化した。

ひとつ付け加える。阿英目録が原因で出てきた魏紹昌発言だ。『官場現形記』海賊版について阿英は次のように記述している（傍線省略）。

又光緒三十年（一九〇四）翻本。托日本知新社版，吉田太郎著。81頁

阿英は海賊版を確かに所蔵していた。1904年の復刻本だとしている。ただし、それが12回1冊本であることを説明していない。これが原因だろう。魏紹昌はこの海賊版について奇妙な解説をした。関係部分のみを抜き出す。

吉田太郎著だといつわった日本知新社は……光緒三十年（1904）と印刷しているが、それでは世界繁華報館の初編12回が刊行された翌年になる。その時全部はまだ出揃っていなかった。この日付はたぶん正確ではない。

假託吉田太郎著的日本知新报社本……刊印日期均署光緒三十年（一九〇四），即世界繁華報館初編十二回刊行的次年，其時全書尚未出齊，此日期恐不確」（『李伯元研究資料』72頁）

省略したのは粵東書局本だ。ここでは関係がないので触れない。

魏紹昌は勘違いしている。阿英目録に回数まで書いていないからだろう。日本知新社は全60回であると錯覚しているのだ。実物を見ないで「この日付はたぶん正確ではない〔此日期恐不確〕」と説明したのは無責任である。見ていないのであれば「未見」と表示すればよか

った。専門資料集だから未見とは書くことができなかったのか。魏紹昌は見栄をはっていらぬ推測をしたものだ。

3 汪家熔のばあい

『繡像小説』の主編(編集長)はだれか。国際的な討論が起こったことがある。1980年代だ。

汪家熔(1929-)は商務印書館に勤務していた時、『繡像小説』の李伯元主編説を否定する論文を発表した。つぎのとおり。「商務印書館出版的半月刊——《繡像小説》」(『新聞研究資料』12輯 1982)、「《繡像小説》及其編輯人」(『出版史料』第2輯 1983)。

それまで阿英をはじめとして誰もが李伯元が主編であると書いてきた。これが定説だから異論を提出した研究者はいない。それを『繡像小説』の版元であった商務印書館の汪家熔が否定したのだ。興味深い。汪家熔は商務印書館の内部資料にもとづいて立論したと普通は考えるだろう。しかしおかしなことに、論文を読んでも新しい資料は提出されてはいないのだった。

汪家熔が提示した根拠は主としてふたつある。

李伯元が該誌の主編だったと証言する友人がいない。もうひとつは商務印書館編訳所の張元済が李伯元に雑誌の編集をまかせるはずがない。なぜなら李伯元は「花柳界のボス」で評判がよくないからだ。それでは誰が主編かといえば、夏曾佑の名前をあげた。しかし夏曾佑が主編である資料を出しているわけではない。

汪家熔が示したのは状況証拠にすぎない。くり返すが具体的な文献はなかった。

私は客観的な事実を提示して反論した。すなわち『繡像小説』に渡していた劉鉄雲「老殘遊記」第11回原稿を没書にし、あとでそれから盗用できるのは『繡像小説』の主編しかいない。盗用したのは李伯元「文明小史」であるから李伯元が『繡像小説』の主編である(「誰は《繡

像小説》的編輯人」『光明日報』1984)。当時は『繡像小説』の発行遅延説は提出されていなかった。私も阿英説を支持していたころのことだ。

汪家熔はそれに対して「劉鶚和李伯元誰抄襲誰？」(『光明日報』1984)を発表して反論した。李伯元が劉鉄雲から盗用した(これが定説)というのが事実はその逆だという。劉鉄雲が李伯元の作品を盗用した。汪家熔は樽本に反論するために阿英と魏紹昌の指摘を否定したのである。

汪家熔が根拠のひとつとしたのは前述魏紹昌の出した解決できない3疑問である。3疑問があるのは、盗用関係そのものが存在しないからだ。

彼がいたいことはこうだ。李伯元が劉鉄雲を盗用したと考えると3疑問が発生する。その逆であれば3疑問は生じないということらしい。汪家熔自身も3疑問について解答することができなかったとわかる。

汪家熔が主張する根拠のもうひとつは、樽本が発表した論文である。すなわち1905年旧暦十月の劉鉄雲日記に初集第11回を書いたと指摘したではないか、と。李伯元「文明小史」第59回は1905年旧暦七月の雑誌掲載だ(発行遅延説が出てくるまえの定説)。李伯元の作品公表が劉鉄雲の原稿執筆に先行する。ゆえにあとの劉鉄雲が李伯元を盗用した。樽本の論文を逆手にとって言い負かしたつもりだ。

汪家熔の反論を読んで私は奇妙な気がした。従来から明らかにされている「老殘遊記」執筆公表についての経緯を汪家熔が知らないことが分かったからだ。専門知識がなくても発言する人らしい。劉大神の重要論文はおろか『老殘遊記資料』すら十分に読み込んでいるようには思えない。『繡像小説』に連載中の「老殘遊記」がなぜ突然中断したのか汪家熔は考えてもみなかった。考えたのであれば持説に不都合だから切り捨てた。

汪家熔が主張するのは両作品発表の表面的な

時間差のみである。劉鉄雲が執筆した第11回原稿の中身についての認識がない。そこにこそ問題を解く鍵が隠されている。私はそのことを指摘しているのだ。しかし汪家熔は肝心の箇所を知らぬ顔をして通過する。重要だという認識がないから見逃すのだろう。

劉厚沢らは劉鉄雲日記に見える第11回原稿は二集のものだと思込んでいた。その原因が阿英の断定にあったことはすでに述べた。汪家熔は樽本論文(誰かが漢訳したもの)を読んでいる。読んでいるにもかかわらず第11回原稿をいかにも最初の執筆であるかのように説明した。そうしなければ李伯元「文明小史」第59回公表の1905年旧暦七月(当時の定説)よりも遅くならないからだ。

ここが肝心の箇所だ。李伯元が没書にしたのは第11回原稿だ。劉鉄雲は下書き原稿を手元に残り清書したものを李伯元に渡した。没書を理由に劉鉄雲は原稿執筆を中止したのだ。のちに『天津日日新聞』が再度掲載するというので没書にされた第11回原稿を復元する必要がある。劉鉄雲は手元に残してあった下書き原稿にもとづいて第11回原稿を復元した。この1905年旧暦十月の原稿執筆は2回目である。汪家熔は私が指摘した原稿の復元に触れない。彼はあくまでも最初の原稿執筆だという前提で発言した。間違いに決まっている。「文明小史」第59回が「老残遊記」から盗用できたのは第11回原稿が李伯元と歐陽鉅源の手元にあったからだ。

劉鉄雲が李伯元から文章を盗んだと主張する研究者は、汪家熔を除いてはそれ以前にいなかったし以後も出現しなかった。汪家熔の珍説に追従する人がいれば彼の自爆に巻き込まれてしまっただろう。後続の犠牲者が出なかったのはさいわいであった。

『繡像小説』主編問題にもどる。

方山が新しい資料を発掘した(「李伯元確曾編輯《繡像小説》」『光明日報』1985)。1905年の上海調査記録である。『繡像小説』の責任者

は李伯元だと記載されているという。1905年当時、筆名南亭亭長は有名だ。しかしそれが李伯元であることを知るのは彼の知人に限られている。一般人でいえば皆無だった。その李伯元名が書類に記録されている。客観的にみて有力な証拠資料だと思う。汪家熔は実物を確認するために記録が所蔵されている南京まで行ったそう。その結果は信用できない文献だという。理解するのがむづかしい。否定するのが目的で見に行ったのではないかと疑う。

『繡像小説』の主編が李伯元かどうかについて『出版史料』第5輯(1986)が特集を組んだ。

主編問題が解決するまでにはそれから長い時間が必要だった。討論がはじまって17年後のことだ。2001年に劉徳隆が1907年『時報』の商務印書館広告に「商務印書館/南亭亭長/繡像小説」とあるのを発見した。劉徳隆はこれについてなにも説明しなかった。しかし、私はこれこそが重要証拠であると一瞬で理解したのだ。機会を作って上海図書館へ行き新聞のマイクロフィルムで確認した。『時報』のほかにも『中外日報』に同様の広告があることもわかった。

漢語で「鉄証」という。『繡像小説』の版元である商務印書館そのものが編集者に南亭亭長李伯元を招いたと宣伝しているのだ。これこそ動かぬ証拠である。

汪家熔は私宛の手紙では自分の間違いを認めた。しかし公的にはこの広告を承認しなかった。理由にならないことをあれこれ書いて結果は信用できないと主張する。実物が存在するにもかかわらず汪家熔は否定する。私は驚いた。ここまできたら何かおかしいと感じるのが普通だろう。汪家熔は提出される資料をことごとく否定するのだ。そうかといって自分で新しい資料を発掘するわけではない。とにかく反論して否定するだけ。

新聞広告という資料が発見されているから汪家熔説はとうの昔に破綻している。さらにもう

ひとつ追撃の証拠が提出された。

欒偉平「夏曾佑、張元済与商務印書館的小説因縁拾遺——《繡像小説》創辦前後張元済致夏曾佑信札八封」(『中国現代文学研究叢刊』2014年第1期)である。商務印書館の張元済が夏曾佑にあてた手紙が公開されたのだ。

張元済はその中で李伯元しか人はいない、という意味のことを述べている。あきらかに『繡像小説』の主編に招こうという考えを示している。

汪家熔によれば評判のよくない李伯元を張元済が呼び寄せるはずがないという主張だった。持説に都合のいい思い込みにすぎない。張元済の手紙のなかが重要かといえ、汪家熔の主張は張元済本人によって否定されたことだ。それに加えて夏曾佑あての手紙だ。汪家熔は李伯元ではなく夏曾佑が主編だと書いたことがある。私はその根拠を質問すると答えることができなかった。それ以後汪家熔は一度も夏曾佑の名前を挙げるのがなかった。夏曾佑が『繡像小説』の主編に予定されていたならば、その本人に李伯元について張元済が言及するはずもない。

汪家熔にとっては李伯元主編説を否定する結論が先にあるとわかる。だから何がでてきてもとにかく反論したいらしい。かたくなに反論するのは直接の論争相手が日本人であったのが理由かと思ったこともある。だが、その後別研究者が資料を発掘して提出したがそれにも反対した。討論相手が日本人だからというわけではなさそうだ。

柳和城も汪家熔と衝突していた。柳和城『書裏書外——張元済与現代中国出版』(上海交通大学出版社2017)である。 罍

田漢漢訳『ハムレット』の底本 3完

荒井由美

莎劇『ハムレット』の第1幕は5場で構成されている。そのうちの3場を田漢は雑誌初出に掲載した。本稿では雑誌掲載の第1場のみを検討する。ロルフが底本であること確認するために、莎劇原文と日訳2種類、田漢漢訳を比較対照する。同時に田漢漢訳の質と傾向を探る。

2 第1場

ノルウェイに敵対するデンマークのエルシノア城である。塔上見張り台が舞台だ。歩哨に立つ衛兵4名(内ひとり途中退場)と先王の亡霊が主な登場人物である。



第1幕 霧団気のある銅版画 ロルフから

ト書きから見ていく。

【ロルフ】 *Elsinore. A Platform before the Castle.*
FRANCISCO at his post. Enter to him BERNARDO.

【戸沢】 エルシノーア 宮城前の見張場
フランシスコ (兵士) 立番して居る、ベルナルド (士官) 交替に入来る (時は真夜中頃)

【坪内】 エルシノーア。宮城前の高台。深夜。
兵卒フランシスコ立番してゐる。こゝへ組頭バアナードー入来る。

【田漢 1】 兀爾西樂兒宮城前面的高台。
仏蘭西斯科方守着衛。伯納爾多登場向他那兒来。

【田漢 2】 兀爾西樂兒。宮城前面的高台。
仏蘭西斯科在那里守着衛。伯納爾多登場向他走来。

莎劇原文と日訳 2 種類は異なる。戸沢は、フランシスコ (兵士) とベルナルド (士官) のように階級をつける。また、坪内も兵卒フランシスコと組頭バアナードーにする。莎劇原文にはそのような説明的単語は書かれていない。なぜ日訳のようになるか。簡単な理由だ。登場人物表に戸沢は兵士、武官と、坪内は兵卒、武官 (組頭) とつけているからだ。日訳に際して説明的に付加した。それらは莎劇原文に a soldier また officer とあるのをそのまま取り入れた。田漢も単行本では人物表を漢訳して、一兵士、軍官としている (雑誌初出では人物表は未掲載)。だが、莎劇の原文ト書きに使われていないのだから漢訳しなかつただけ。ここを見るだけで田漢漢訳は坪内日訳の重訳ではない。重訳説は根拠のない主張だということがわかる。

もうひとつある。戸沢と坪内は時間を「真夜中頃」「深夜」とする。だが、グローブ、ロルフ、ダウデンともに時間の記述はない。原文にはないト書きだから田漢も漢訳していない。

田漢は初出で「方」としたのを単行本では「在那里」と書き換えた。ト書きまでもより口語化させた。

交替できることを喜んだフランシスコの台詞の一部に次のようにある。

【ロルフ】 't is bitter cold, And I am sick at heart.

【戸沢】 酷い寒さで、心から弱り果てましたところ

【坪内】 敵う寒うござる、心が切なうてなりませぬ。

【田漢 1】 此地寒冷極了、心都痛起来了。

【田漢 2】 此地怪冷的、我站得討厭起来了。

sick at heart とは気が滅入る、悲観する、悩むという意味だ。「心から」「心が」とわざわざ日訳するまでもない。田漢は、日訳に引かれたものか「心が痛くなってきた」と最初は漢訳した。漢語で非常に悲しいという意味だ。ここも莎劇原文 (ロルフ) に忠実であるといえる。後に手を入れて「いやになってきた」と変更したことがわかる。

バーナードーがそれまでの様子をたずねる。

【ロルフ】 Have you had quiet guard ?

【戸沢】 別條もなかりしか

【坪内】 何も別條はおじやらなんだか?

【田漢 1】 你守衛的時候還安靜嗎?

【田漢 2】 你守衛的時候還安靜嗎?

坪内の「おじやらなんだか」はまことに芝居の台詞としてあてはまる。見張りに立っているのはわかっている。だから田漢のようにわざわざ「見張っていたとき [守衛的時候] 」と漢訳する必要はない。しかし、田漢は原文の guard をどうしても翻訳したかったようだ。ここでも田漢は莎劇原文にこだわり、坪内から離れる。

バーナードーの連れが登場する。そのト書きを示す。

【ロルフ】 Enter HORATIO and MARCELLUS.

【戸沢】とホレーシオ（ハムレツ／トの信友：
割り注）マーセラス（士／官）登場

【坪内】若き学者ホレーシオと組頭マーセラス
入来る。

【田漢 1】何勒淑与馬歳勒斯登場。

【田漢 2】何勒淑与馬歳勒斯。登場。

前のト書きと同じ。ここでも戸沢と坪内はふたりともに名前の前後に役柄を記入して説明する。田漢がそうしないのはここも前と同じく莎劇原文に書かれていないからだ。適切な判断だと考える。

ホレイショーとマーセラスが合い言葉をいう。その台詞をホレイショー／マーセラスの順に示す。

【ロルフ】 Friends to this ground. / And liegemen to the Dane.

【戸沢】御国を愛する／大君の臣民共

【坪内】此国の良友。／まつた王家の忠僕。

【田漢 1】我們是本国的良友。／丹麦王的忠僕。

【田漢 2】我們是本国的良友。／丹麦王的忠僕。

田漢の「良友」「忠僕」は坪内を取り入れた。しかし、坪内にはない「丹麦王〔デンマーク王〕」は原文の *the Dane* を忠実に漢訳した結果だ。

先に交替していたバーナードーがふたりを出迎える。ホレイショーはどこだと聞けばホレイショー自身が答える。

【ロルフ】 A piece of him.

【戸沢】ざつと其様な者でムる

【坪内】まづは其様なもので。

【田漢 1】有一点兒像他。

【田漢 2】有一点兒像他。

どこにいるのか、という質問が前にある。普通は「ここにいるぞ」と答えるだろう。それが

A piece of him. というのだからわかりにくい。a piece of は辞書的にいえば「……のようなもの」だから戸沢と坪内のように翻訳するのは間違っていない。しかし、それでは前後の文脈からして理解しにくい。piece は断片、部分という意味だ。ホレイショーが「自分は彼の一部分」と発言する。野島秀勝はそれを「彼の片割れなら、ここに」（12頁）と訳し「ホレイショーの手を意味しているのは確実」と注釈している。納得する。

田漢は独自に判断したのか、日訳のふたつが一致しているのでそれを採用したのかは判別できない。わかりにくいのは一緒だ。

ここは従来から議論のあるところだという。梁実秋は田漢とほぼ同じ「有点兒像他」とする。注をつけて「是他的一部份」と訳すべきで、普通の冗談だという解釈だ。朱生豪は「有這麼一個他」と訳す。参考までに示した。

バーナードーが出迎えの挨拶をする。普通の台詞だ。

【ロルフ】 Welcome, Horatio; welcome, good Marcellus.

【戸沢】ようこそ御出下されたホレーシオ殿、マーセラス殿ようこそ

【坪内】ようこそホレーシオどの。ようこそマーセラスどの。

【田漢 1】歡迎得很，何勒淑；歡迎得很；馬歳拉斯好友。

【田漢 2】歡迎得很，何勒淑。歡迎得很，好馬歳拉斯。

good Marcellus の good は訳さないものらしい。だが、田漢はそこにこだわった。「好友」「好」とわざわざ漢訳せずにはいられなかった。日本語訳は無視したことになる。この部分は、田漢の使用する符号が変化してロルフと異なっている。理由は不明。のちの単行本でも符号の不一致は生じている。

莎劇原本に異同があることを次に指摘する。グローブ、ロルフ、ダウデンともに一致する箇所だ。だから日訳も田漢漢訳も同じ。問題はなさそうに見える箇所に問題がある。あの物、つまり亡霊は出現したか、という台詞は誰が言ったのか。

【ロルフ】 *Marcellus. What, has this thing appear'd again to-night?*

【戸沢】 マーセ 何と今夜も又彼のものは現はれましたか

【坪内】 マー え、彼の物は今宵もまた出ましたかな？

【田漢 1】 馬 甚麼哪，那個東西今晚又出現了沒有？

【田漢 2】 馬 甚麼哪，那個東西今晚又出現了沒有？

「マーセ」「マー」「馬」はすべてマーセラスを示す。田漢漢訳は坪内に似ている。

何が問題かと言えば、莎劇原文ですでに発言者が異なっていることだ。第1クォートとフォリオはマーセラスの台詞だ。しかし第2クォートはホレイショーにしている。互換可能らしい。

グローブ、ロルフ、ダウデンともにマーセラスだから日訳も田漢漢訳もそうする。野島訳は第2クォートのホレイショーを採用する。

ちなみに登場人物評に掲げられる先王の亡霊 Ghost は、戸沢が「霊」、坪内が「亡霊」、田漢は「陰魂」（梁実秋「鬼」、朱生豪「鬼魂」）としている。

先王の亡霊について「*this thing* あの物」と書いている。別の箇所の表現が微妙に異なっている。まとめて示す。

【ロルフ】 *this dreaded sight/this apparition /it*

【戸沢】 彼の恐ろしの幻/彼の妖怪/其妖怪

【坪内】 怪異/怪しい物/×（訳語なし）

【田漢 1】 那個怪象/那個怪物/他

【田漢 2】 那個怪像/那個怪物/他

田漢は、ロルフの *this* を「那個」に、*it* を「他」に漢訳する。原文を忠実に翻訳するようにつとめていることがわかる。戸沢が「彼」「其」としているのに似る。と同時に坪内の「怪しい物」を取り入れている。この部分では、ロルフ、戸沢、坪内は田漢の中ではほぼ等価値である。

バーナードがホレイショーたちに昨夜見た亡霊の状況を説明しているところに先王が出現する。そのト書きの順序が坪内だけほかと違う。ト書きの直前から引用する。

【ロルフ】 *The bell then beating one, —*

Enter Ghost.

【戸沢】 折しも鳴るは一時の鐘——

と先王の亡霊現出る

【坪内】 折しも鳴渡る一時の鐘……

マー しつ、だまらしめ。あれ、あそこへ現れました！

先の王ハムレットの亡霊現れる。

【田漢 1】 自鳴鐘剛打一点馬歳拉斯和我自己，……！

陰魂登場

【田漢 2】 自鳴鐘剛打一点，馬歳拉斯和我，……

陰魂登場

ト書きの位置が違うのは坪内の底本がほかと異なるのが原因だろう。田漢は雑誌初出に「！」を使用しているが、単行本では削除した。ロルフにはもともと感嘆符は使われていない。ト書きの位置について再びいえば田漢漢訳と坪内とは違っている。こういう小さい箇所が大きな意味を持つ。田漢漢訳は坪内から離れるのである。

さきほど亡霊をロルフが示して *it* を使用し

田漢がそれを「他」に漢訳すると指摘した。重複するようだが、同じような箇所をつぎにあげる。バーナードーのホレイショーに向けた台詞だ。

【ロルフ】 Looks it not like the king? mark it, Horatio.

【戸沢】 何と先王に似申した姿であらうが、よう御覧あれホレーシオ殿

【坪内】 ホレーシオどの、先君のお姿に其儘でござらうかの？

【田漢 1】 你看他不像先王陛下嗎？注意他，何勒淑。

【田漢 2】 你看他不像先王陛下嗎？意注他，何勒淑。

2箇所に出てくる it を日訳は両者とも翻訳しない。日本語はそれで十分成立する。だが田漢は、it を「他」に直して省略しない。こういうところに莎劇原文を忠実に漢訳しようとする田漢の翻訳姿勢を見ることができる。初出の「注意」は単行本では手直ししている。

ホレイショーに与えられたつぎの台詞にはむつかしい単語が含まれる（日本語のくり返し符号は文字に直す）。

【ロルフ】 What art thou that usurp'st this time of night,
Together with that fair and warlike form
In which the majesty of buried Denmark
Did sometimes march? by heaven I charge thee, speak!

【戸沢】 そもそも汝は何者なれば、静けき夜半を我物顔、故陛下がそのかみの、気高く勇ましかりし御姿を、妄りに装ひ擬らうや、其訳語れ、イザ聞かう

【坪内】 汝本来何者なれば、故のデンマーク大君の武しく荘厳しい御軍装を借り奉つて、此様な深夜には横行するぞ？ 敢て汝に命ずるわい、

語れ。

【田漢 1】 你是甚麼鬼怪敢在晚上這個時候任意横行，并且穿着丹麦的先王陛下曾經御過的華美威嚴的軍服？我敢命令你，說！

【田漢 2】 你是甚麼鬼怪敢在晚上這個時候任意横行，并且穿着丹麦的先王陛下曾經御過的華美威嚴的軍服？我敢命令你，說！

this time of night は「夜のこの時刻」だ。先に鐘が1度鳴ったと台詞があった。戸沢は「夜半」に、坪内は「此様な深夜」とした。それでいい。田漢は原文のままに「在晚上這個時候」だ。

理解しにくいのは原文の usurp'st である。だいいちその綴りそのもので辞書には出てこない。usurp ならある。『商務書館華英字典』（癸卯1903年四月十四日/1915.6.20十三版）には Usurp 「霸佔，強霸，侵奪，僭，篡奪，攘」と説明する。ヘボン（ヘプバーン）『和英林集成』（影印本）の英和部分には「Muri ni kurai wo toru, kurai wo ubaitoru, sandatsu suru. 」と記述して英華字典と同じだ。「時刻を篡奪する」というのは理解するのがむつかしい。

そこで戸沢は「静けき夜半を我物顔」とした。我が物顔にやり放題と理解する。一方の坪内は「此様な深夜には横行するぞ？」と訳し原文後ろの Did sometimes march? と一体化させてしまった。野島日訳の「草木も眠るこの深夜を侵し」というのがわかりやすい。

田漢漢訳は、戸沢の「我物顔」を「任意」に、坪内の「横行」をそのまま利用した。

戸沢「御姿」、坪内「御軍装」の「御」は敬意を表わしているにすぎない。ところが田漢はなぜか惑わされたらしく「曾經御過的」として動詞扱いだ。動詞としては「御車」などが確かにある。だが、上の部分では「穿」と同じ意味で使用したように見える。詳細不明。梁実秋は「並且妄穿丹麦先王曾經穿過的威武堂皇的軍装」

とする。これは理解できる。

日訳も漢訳も by heaven 「天に代わって」を無視している。そうする理由はわからない

符号の使い方を見る。亡霊が出ていく。ホレイションが亡霊にむかって叫ぶ。

【ロルフ】 Stay! speak, speak! I charge thee, speak!

【戸沢】 停れ、其訳語れ、イザイザ、其訳語れ

【坪内】 待て！ 語れ、語れ！ 敢て汝に命ずるわい、語れ

【田漢 1】 停着，你說，你說，我命令你，說！

【田漢 2】 停着！ 你說，你說！ 我命令你，說！

田漢は雑誌初出でいくつかの箇所感嘆符を打ち忘れた。単行本ではそれを補いロルフと一致させた。坪内には最後部分の感嘆符がない。田漢は細かく修正している。

マーセラスは自国の軍備増強について疑問を提起する。次はその一部分だ。

【ロルフ】 And why such daily cast of brazen cannon,

And foreign mart for implements of war;

Why such impress of shipwrights, whose sore task

Does not divide the Sunday from the week;

【戸沢】 いかなれば、かく日々に巨砲を鑄、又は外国より戦道具を購入るゝぞ、いかなれば船大工は、平日休日の差別もなく、痛ましき迄追使はるゝぞ、

【坪内】 毎日の大砲鑄造、まつた外国より夥しい武器の買入、剩さへ船大工を駆集めて休日も与れぬ苛酷い賦役。

【田漢 1】 為甚麼每日要那樣鑄造銅砲，而且又從外國買入那些軍械；為甚麼每星期禮拜日都不讓休息強迫那些造船的工匠作工；

【田漢 2】 為甚麼每日要那樣鑄造銅砲，而且又

從外國買軍械進來；為甚麼每週的禮拜日都不讓休息強迫那些造船的工匠作工；

ロルフと田漢漢訳の符号「；」が一致している。戸沢、坪内とは違う。

私が注目するのは、原文の brazen cannon (真鍮の大砲) と the Sunday from the week (日曜と週日) の部分だ。

戸沢は「巨砲」、坪内は「大砲」で材質まで訳していない。brazen は英華字典では「銅做的」とある。田漢はそこから「銅砲」とした。また、原文の Sunday を日訳では「休日」とする。田漢は、「禮拜日」として原文を直訳した。田漢は莎劇原文を忠実に翻訳しようとしているのが明らかだ。漢訳が日訳からの重訳だと主張する研究者は、こういう細かい部分を見ていないのではなからうか。

坪内の「まつた外国より夥しい武器の買入」を利用して田漢は初出で「又從外國買入那些軍械」と「買入」を共有する。だが、単行本では「又從外國買軍械進來」と書き直してより自然な現代漢語にしている。

田漢はロルフにもとづき符号を含めて忠実に漢訳しようとした。これが基本だ。ところが、当てはまらない箇所もでてくる。そこを指摘しておきたい。

ホレイションが先王ハムレットについて説明する。

【ロルフ】 our valiant Hamlet—For so this side of our known world esteem'd him—

【戸沢】 武勇絶倫と遠近に、其名も高き故陛下なれば、

【坪内】 名に負ふ勇猛の先君とて、

【田漢 1】 我們武烈的哈孟雷特老王，威名蓋世，

【田漢 2】 我們武烈的哈孟雷特老王，威名蓋世，

田漢は原文の「—」をどうしたわけか削除した。

もうひとつ奇妙な部分がある。

先王ハムレットがノルウェイ王と決闘をするくだりでひとつの決まりを説明する。賭けられた命と領土は勝者が取る。決闘するふたりが賭けるのは同じものだ。命には命を、領土には領土だ。当然だろう。ふたつに差があるならば賭けは成立しない。

【ロルフ】 Against the which a moiety competent

Was gaged by our king;

【戸沢】又我王にも、之に相応しき賭をなされ、

【坪内】もつとも之に対して相当の所領を賭けられたれば、

【田漢 1】那麼我們的先王當然也會把他所有的疆土之一半，打下賭來；

【田漢 2】那麼我們的先王當然也會把他所有的疆土之一半，打下賭來；

戸沢、坪内ともに、先王ハムレットが賭けたのは同じものであると翻訳している。ところが田漢が漢訳して、先王が賭けたのは領土の半分（他所有的疆土之一半）だとする。日訳の「相応しき」「相当」とは違う。

competent は形容詞だが、equivalent という注釈もある。「十分なもの」「相当なもの」と理解する。問題は moiety だ。英華字典は「一半」「半分」「一股」と説明する。田漢はこの辞書の説明（これが一般的ではあるが）を採用した。この部分について田漢は戸沢も坪内も無視した。

戸沢が底本としたダウデンはそこに a portion, not necessarily a half. という注をつけている。「分け前」「取り分」であって半分とは限らない。戸沢、坪内の日本語訳でいい。

考えるに、田漢はあくまでも莎劇原文に忠実な漢訳をめざした。日訳は参照にとどめた。たよりのひとつが英華字典だ。それにもとづき自分独自の翻訳をしようとした。そういう田漢の

姿勢が、ここでは裏目に出たと思われる。賭が成立するには賭ける物がお互いに同じでなければならぬという一般常識を忘れたこともあるだろう。

ここは田漢の誤解である。ただし、それを嘲笑してはならない。誤りだと批判する必要もない。ここに見る彼の誤訳は、とりもなおさず田漢が莎劇原文にもとづいて自力で漢訳しようとして試行錯誤しながら悪戦苦闘していた事実を私たちに教えてくれる。田漢漢訳が日訳を単に重訳したのであれば起り得なかった誤りだ。田漢が独自の漢訳をしたいと望んだからこそ生じた。田漢以前には莎劇から直接漢訳した『ハムレット』はなかったのだ。独力でそれを漢訳しようとした熱意があったことを知れば小さな誤訳は文字通りの瑕瑾であるにすぎない。

田漢は莎劇『ハムレット』を漢訳するにあたり大きな努力を払った。底本とする原作英文を選択し、日訳を集め、日本語の関係文献を読んでいた。

それを瀬戸博士は「当時の田漢に『ハムレット』を訳せる英語力があつたか疑問で、日本語からの重訳の可能性が強い」と説明して切って捨てた。田漢に対する不当に低い評価である。田漢が莎劇『ハムレット』を漢訳するという大仕事をひとりで切り開く努力とやりとげた成果を瀬戸博士は無視したのである。

林訳の時もそうだったが先行する翻訳についての敬意と配慮が不足しているといわざるをえない。それは中国学界の従来からの姿勢と一致している。つまり、瀬戸博士は中国学界に事大して一貫しているという意味だ。林紓と田漢について独自の観点もなければ自分で新しい発見をするわけでもない。

どのみち田漢漢訳が日本語からの重訳であると主張するのは間違っている。

さらに1例をあげたい。

ホレイションの説明が続く。決闘に敗れたのは先のノルウェイ王である。その息子（同名の）

フォーティンプラスが失った領土を回復しようと画策している。

【ロルフ】 which is no other —
As it doth well appear unto our state —
But to recover of us, by strong hand
And terms compulsative, those foresaid lands
So by his father lost:

【戸沢】我が要路の人には明白、武力を用ひ強迫し、亡父が失ひし件の領地を、取還さむの下心

【坪内】一定暴威を以て父が旧領を取戻さん結構と廟議一決、

【田漢 1】這不在講——丹麥國的人誰都知道——他是想用強硬的手段和強迫的条件把剛纔說過的父親所失掉的地方從我們手裏恢復轉去：

【田漢 2】這不在講——丹麥國的人誰都知道——他是想用強硬的手段和強迫的条件把剛纔說過的父親所失掉的地方從我們手裏恢復轉去：

ロルフと田漢漢訳が符号で一致していることはすでに指摘している。

その符号で囲んだ As it doth well appear unto our state である。戸沢は「我が要路の人には明白」とした。坪内はより簡潔に「廟議一決」としたから少し理解しにくい。田漢は「デンマーク国の人であれば誰でも知っている」とロルフを直訳する。

compulsative は莎劇版本によって compulsory などとあって表記が違う。一般の辞書には収録されない。英華字書でも同じことだ。近い単語に compulsion 「勉強、強逼、用権勢」、また compulsory 「強迫的、勒迫的」がある。田漢はそれらを手がかりに戸沢の「強迫し」を参照したようだ。「強迫的」と漢訳して正しい。つまり、ここでは坪内ではなく戸沢を選択した。しかし、あくまでも基本はロルフ原文に基づいていることはいうまでもない。

先王の亡霊が再び登場した。ホレイションが

亡霊に話しかける台詞の一部だ。たびたび出現する理由のひとつを質問する。

【ロルフ】 O, speak!
Or if thou hast uphoarded in thy life
Extorted treasure in the womb of earth,
For which, they say, you spirits oft walk in death,

【The cock crows.

【戸沢】おゝ云ひて見よ、さては生前、不義の宝を地中に埋め置けば、亡魂此世に迷ふと聞く、

【坪内】おゝ、語れ！……或は噂の如く、生前地中に埋めおいたる不浄財に執念残つて、能い浮ばずに彷徨ふか？

【田漢 1】啊，你說！或者像人家傳說的，你生前把所得的不義之財埋在地下，死後你的靈魂還捨不得他所以常常出來彷徨。

鶏鳴

【田漢 2】啊，你說！或者像人家傳說的，你生前把所得的不義之財埋在地下，死後你的靈魂還捨不得他所以常常出來彷徨，——

【鶏鳴

田漢漢訳の「鶏鳴」はロルフの The cock crows. とト書きの配置場所がそのままだ。ところが戸沢の「と雞の鳴声する」、および坪内の「鶏鳴く。」が上に見えない。それは彼らの底本がロルフではないからにすぎない。

Extorted treasure とは、不正に得た財宝、強奪した財宝、という意味である。戸沢は「不義の宝」とし、坪内は「不浄財」と訳した。田漢漢訳の「不義之財」は戸沢の「不義の」、坪内の「財」が一致する。ちなみに梁実秋は「勒索暴斂的財宝」、朱生豪は「搜括得来的財宝」と漢訳している。田漢に比較すると説明口調であるといえる。

坪内の「彷徨ふ」と田漢の「彷徨」が同じ。

田漢はここはロルフによりながら、坪内と戸沢の語句の一部を折衷採用したように見える。

漢字が同じなのだから。

亡霊はうろついている。バーナードとホレイションはそれぞれに 'T is here! 'T is here! と同じ台詞を口にする。

戸沢は「ソレ其處に」「コレ其處に」と変化をつけた。坪内は「こゝちや!」「こゝちや!」と重複させる。田漢は雑誌初出が「在此地!」「在此地!」で、単行本では「在這里!」「在這里!」に書き換えた。坪内によったというわけではなく、ロルフそのままである。ただし、田漢漢訳で最後に「——」をつけ加えた。ロルフから離れる。理由不明。

鶏が鳴いて亡霊は消失した。ホレイションは鶏の鳴き声で亡霊が消えた理由を説明する。雄鳥の鳴き声で海、火、地中、空中にさまよい迷う霊たちは自分たちの居場所にもどっていく。

【ロルフ】 The extravagant and erring spirit hies

To his confine:

【戸沢】 彷徨ひありく亡者共、急ぎ己が火宅に走る

【坪内】 彷徨ふ精霊も懼れ隠る

【田漢 1】 一切不安分的魔鬼都要捨命的奔回巢穴:

【田漢 2】 一切不安分的魔鬼都要捨命的奔回巢穴:

confine が問題だ。居場所としたが、もともと閉じこめられていた場所という意味である。田漢は「巢穴」とした。参考までに梁実秋は「原居」、朱生豪は田漢と同じく「巢穴」とする。また野島は「それぞれに定められたおのが領分」(22頁)と訳している。

坪内は訳語を当てなかった。田漢の漢訳は戸沢の「火宅」とも違う。「巢穴」を使用したところこそ田漢の工夫だった。ここにロルフにより原文を忠実に漢訳しながら独自性を主張しようとする田漢の誠実な翻訳姿勢を見ることができ

る。

小さな箇所を引用する。ホレイションは今夜目撃したことをハムレットに報告することにした。そのハムレットをどう呼ぶか。

【ロルフ】 young Hamlet

【戸沢】 ハムレット君

【坪内】 ハムレット様

【田漢 1】 少哈孟雷特

【田漢 2】 少哈孟雷特

young だから朱生豪は「年輕的哈姆雷特」とした。梁実秋は無視。田漢は若いという意味の「少」を1字当てて簡潔な漢訳としている。ここも独自なところだ。

最後にロルフから少し離れる田漢漢訳を示す。同じくホレイションの台詞。王子に報告するのが妥当ではないかとマーセラスに問う場面だ。

【ロルフ】 Do you consent we shall acquaint him with it,

As needful in our loves, fitting our duty?

【戸沢】 御同意ならばさやう致さう 君を思ふ誠よりも、臣たる務めの上よりも、至当の事とは思されませぬか

【坪内】 又此事言上は、さるは王子を思ふ吾等の真情まつた忠勤でもございまする。

【田漢 1】 我以為依我們情誼上和責任上都應該去報告他，你們贊成不贊成呢？

【田漢 2】 我以為我們情誼上和責任上都應該去報告他，你們贊成不贊成呢？

莎劇原文では、ハムレットに知らせるのを賛成してくれるか、で1文をまとめている。戸沢のように次に「君を思ふ誠」「臣たる務め」がくる。これが原文だ。だから重訳するならば戸沢のままでよい。だが、田漢はそうしなかった。2文の前後を入れ替えて「賛成してくれるか?」を後ろに配置した。ここも田漢独自の工夫だ。

これまで具体的に見れば十分ではなからうか。
私は田漢が底本とした莎劇原文を特定した。
日本語訳2種類との関係も明らかにした。研究者の誰も提示することがなかったことである。そう念を押すのは、理解しない人がいるかもしれないからだ。

12 結 論

田漢は『ハムレット』を漢訳するにあたり莎劇原文のロルフ(1890)を底本に採用した。英漢字典も使いながら彼独自の漢訳をめざして模索したのが事実だ。これは強調されている。ロルフ本の傍らに戸沢日訳(1905)と坪内日訳(1909)を置いて参照しつつ翻訳作業を続けた。日訳本は参照したが、どちらかの片方に全面的に依存したわけではない。基本は英文のロルフだ。日訳は時に採用し時に無視しての翻訳だった。あくまでも田漢が主体となって制御した。漢訳単行本(1922)につけた「訳叙」には、戸沢日訳所収の解説と坪内逍遙の文章(1911)から部分的に引用要約したものを収録する。英文原本、日訳本に掲載されたいくつかの挿絵を集めて単行本に添えた。

「当時の田漢に『ハムレット』を訳せる英語力があつたか疑問で、日本語からの重訳の可能性が強い」。「中国現代文学演劇研究」の専門家瀬戸博士はそう書いた。瀬戸博士は田漢の英語能力を不当に低く評価し田漢を侮辱している。資料に基づかず証拠も提出しない瀬戸博士の記述は、軽率であると同時に無責任である。いうまでもなく正しくない。

以上が田漢漢訳『ハムレット』の底本に関する私の結論である。 ㊦

【参考文献】

『田漢全集』第19巻訳著 石家荘・花山文藝出版社
2000.12

シェイクスピア作、野島秀勝訳『ハムレット』岩波
文庫2002.1.16/2009.5.25第七刷
小谷一郎「田漢と日本(一):「近代」との出会い」
『日本アジア研究:埼玉大学大学院文化科学研究
科博士後期課程紀要』創刊号 2004.3.31 電字版
夏 嵐「田漢的戲劇翻譯——以日文劇作翻譯為中
心」大阪大学『言語文化研究』42 2016.3.31
電字版

★

李爽学『中外文学関係論稿』

台湾・聯経出版事業股份有限公司2015.1
莎士比亞入華記
可能異域為招魂——蘇曼殊漢訳拜倫縁起
在東西方的夾縫中思考——傅斯年「西学為用」的
五四文学観

『中国現代文学研究叢刊』2018年第5期

(総第226期) 2018.5.15

“情”与“俠”的彙流:《兒女英雄伝》之後的通
俗小説 ……張 蕾
晚清“新小説”概念的生成考略…田雪菲、李永東

『新聞出版博物館』2018年第1期

(総第32期) 2018.6

晚清民国石印業的発端与拓展
——以上海為中心(下) ……張 偉
丁景唐談《中国新文学大系》
……丁景唐口述、林麗成採訪整理
書商眼中的“二十世紀中国之怪現狀”——新發現
的清末《杭州賣書記》簡介 ……張仲民

对陈家麟生平及其译作的补遗与考证

王 玉

内容提要：陈家麟担任过林纾的“口译者”，是“清末民初一位十分活跃的翻译家”。本文主要在古二德《陈家麟传记及其翻译小说〈鲍亦登侦探案〉等原著鉴定研究》（刊发于2016年1月1日《清末小说通讯》第120期）的基础上，对陈家麟生平及其译作做一些补遗与考证工作。

关键词：陈家麟 口译者 清末民初 翻译小说

陈家麟是“清末民初一位十分活跃的翻译家”^{*1}，以林纾的助手闻名于世。笔者因为关注俄国作家契诃夫作品的汉译情况，注意到了陈大镫、陈家麟合译的《风俗闲评》，进而搜集了一些陈家麟的资料。近日，笔者在日本出版的《清末小说通讯》（第120期，2016年1月1日）上读到了古二德《陈家麟传记及其翻译小说〈鲍亦登侦探案〉等原著鉴定研究》一文，深感史料翔实、考证扎实。考虑到有些史料该文仍没有涉及，因此不揣鄙陋欲对陈家麟生平及其译作做一些补遗与考证工作。

一、关于陈家麟生平的补遗

陈家麟字绂卿，但不少学术著作将“绂卿”写成“黻卿”，如郭延礼《中国近代翻译文学概论》、张旭《林纾年谱长编》等，这或许因“绂”通“黻”的缘故。另外，胡从经认为，杜衡^{*2}也

是陈家麟的字。此处“杜衡”或是林纾口中的“陈生杜衡”。关于陈家麟的生年，有1880年^{*3}和1877年^{*4}两种记载。1932年，陈家麟被河南大学聘为教授，时年“五十三岁”^{*5}。据此推算，当以1880年为准。陈家麟译作常署“静海陈家麟”，笔者在《〈益世报〉天津资料点校汇编》上查到这样一句话，“陈家麟，良王庄人，为林琴南助手，其小说在上海颇负盛名”^{*6}。由此可以断定陈家麟是直隶静海县良王庄人。良王庄位于天津市西南部，现在是静海区下辖的一个乡。

陈家麟留学“叩林海军大学”，见于徐友春《民国人物大辞典》（1991，2007）和淡泊《中华万姓谱》（2006）。笔者发现，在北京高等师范学校附属中学校《1915年教员一览表》中，陈家麟的履历是“前北洋水师学堂毕业”，未提“叩林海军大学”。另据古二德引美国康奈尔大学资料，陈家麟1894年毕业于北洋水师学堂，但笔者查阅《天津水师学堂历届毕业生名单》^{*7}发现，光绪二十年（1894年）该学堂有11名毕业生，姓陈的只有一位，叫陈源亨，此人1922年被授陆军少将。倒是光绪十年（1884年）有个毕业生叫陈杜衡，此人曾留学“英国格林书院”，后任交通部南洋大学（上海交通大学前身）校长^{*8}，并非翻译家陈家麟。此外，考虑到1894届毕业生多人在甲午战争中牺牲^{*9}，陈家麟即使是本届毕业，也应该会上战场，毕业即出国留学可能性较小。综上，陈家麟毕业于北洋水师学堂和留学叩林海军大学的经历存在疑点。

笔者从《北京高师附中教职员一览表》（本表反映了1901-1921年的师资状况）查到，林纾1901年到北京高师附中任教，陈家麟1912年8月到校，每周8课时，月薪64银元^{*10}。所以，郑逸梅称，“林（畏庐）与陈（家麟）曾同执教鞭于京师五城中学”^{*11}。北京师范大学附属中学的前身即五城学堂，成立于1901年11月2日。1912年改为国立北京高师附中。据《林纾年谱长编》，林纾实是1902年任五城学堂总教习，计十五年之久^{*12}。另据北京高等师范学校附属中学校《1915年教员一览表》可知，陈家麟至少1912-1915年间在北京高等师范学校附属中学校担任英文教员，1915年时每周授课4钟点、月薪32元^{*13}。因此，古二

德文中提到的李奇闻所谓的“教师”，不是“北京师范大学教授”，而是北京高等师范学校附属中学校英文教员。笔者还发现了一篇题为《卫西琴先生全国教育会联合会之演讲》的文章，由陈家麟翻译，发表在1915年《教育周报》第84期上。该文称，“今中国须得一种新教育，为泰西新发明者，合中人之心理与西人之心理，折衷而得其中，则我所提倡孟提索雷之教育是矣”。这反映了陈家麟此时已关注中国的教育问题。

1919年陈家麟出任欧美教育调查委员^{*14}，1920-1921年就读于美国康奈尔大学，在此前后，他还兼任外交、教育两部派充华盛顿会议代表^{*15}一职。1923年，他在《北京高师教育丛刊》发表文章称“余历游欧美，考察其教育状况”^{*16}。陈家麟还向北洋政府建议，“通商以来，各国派教士传教，每将我国鄙秽之野史小说以及种种败坏风俗之书译成西文，传播各国。近来更用电影描写我国杀人放火各种不道德之事，更增轻视我国之心，现在美国教育界重要人物甚欲知我国近来情形。美国各大学教授在社会中颇有势力，并可转移社会之心理。我政府可选派学者分至英美两国，名为留学，实则暗地传播我国文化，令该邦学子洞悉我国立国之特点，使彼渐生钦敬”^{*17}。

1925年，陈家麟任胶澳（即青岛）商埠局洋文秘书兼外交科欧美股股长^{*18}。1927年3月，任筹备接收威海卫委员^{*19}，随后任山东交涉署署长^{*20}；8月，陈家麟任记名全权公使^{*21}；11月，鲁督张宗昌致电国务院，请以二等大绶宝光嘉禾章奖给陈家麟^{*22}。1928年2月13日，上海《新闻报》刊登了一条《陈家麟代办山东大学》的消息。报道称，张宗昌“决定使陈氏代己以校长名义，办理大学，已面向陈氏征求同意，不日即可发表”。报道还介绍了他的履历，“交涉员陈家麟系英伦博士，且曾在美国研究教育文学，回国后，又在北京各大学历充教授”。不过，随着北洋政府的倒台，陈家麟并未当上山东大学校长。1929年，外交部山东交涉署密呈通缉陈家麟，并拍卖其北平住宅以抵公款^{*23}。1930年3月，其位于北京榆钱胡同21号的房产，“面积一亩一分”、“房地总价为2504元”，以“携款潜逃”的名义被查封、拍卖^{*24}。

1932-1935年，陈家麟在河南大学文学院任

教授，教“英国文学”^{*25}。卢冀野在他所著的《中国戏剧概论》序中有这样一段话：“中国戏剧史之写作，据我所知，是友人陈黼卿先生（家麟）的一部英文本最早。陈先生允许赠给我一本，几次写信到英国催去，始终没有寄来，听说至今在英国还很流行，但陈先生自己也觉得太简略了一些。”^{*26}卢冀野是陈家麟在河南大学任教时的同事，他这句话容易让人产生误解，以为陈家麟后来又去了英国。其实他在《柴室小品》中也写过这件事，“那一年，我在河南大学开‘中国戏剧史’，他（陈家麟）说：‘我用英文写过一小册子，不知道在英国绝板没有？我叫他们寄一册来，请你指教。’但一直不曾寄来，也一直不曾给我拜读。”由此可知，是陈家麟自己写信去英国催，而非他本人去了英国，卢冀野写信去催他。这里所说的英文本中国戏剧史，极有可能是古二德发现的陈家麟的康奈尔大学硕士学位论文 *Studies in the Chinese Drama*。

1935年6月12日前，陈家麟回到北京，在弘达学院任教，并和同事蹇先艾合作翻译了数篇短篇小说^{*27}。民办私立弘达学院成立于1922年，1928年8月改为弘达中学（北京市二龙路中学的前身），校址位于北京西单^{*28}。同年，陈家麟还编了一本《高级英文选》，这部书没有公开出版，应该是他在河南大学或弘达学院授课时用的教材。1940年陈家麟在上海《新东方》杂志发表了5篇译作。该杂志是中华洪道社^{*29}社刊。中华洪道社1940年在上海成立，受控于汪伪政府，在北京设有华北办事处。陈家麟此时有可能加入了该社。1941年，六十二岁的陈家麟在沦陷区任伪汉口特别市政府外事室主任^{*30}。此后情况不详。

二、关于陈家麟译作的补遗

陈家麟小说合译者有陈大镫、薛一谔、林纾和蹇先艾等四人。

陈大镫原名陈霞章，号大镫居士，仪征（今扬州市）人，是一位诗人、书法家。他“和林纾一样，是个一点英文都不懂的人”^{*31}。陈大镫似乎长期住在北京，有首诗这样写他，“京阙遨游大灯，戊丁、戊己两诗存。名篇译出遮那德，描

写英雄笔有神”^{*32}。他还给在梁实秋(1923年8月前生活在北京)补习过国文,梁实秋曾回忆,“我父亲要我每年暑假补习国文作文,请陈大镫先生批改作文,对文言文及旧诗,稍窥门径”^{*33}。陈家麟和陈大镫合译的作品有18种,其中11种出版了单行本,分别是《博徒别传》(1908)、《遮那德自伐八事》(1909)、《露惜传》(1909)、《天刑记》(1915)、《风俗闲评》(1916)、《鲍亦登侦探案》(1916)、《惊婚记》(1917)、《犹龙录》(1917)、《婀娜小史》(1917)、《革心记》(1917)、《十之九》(1918)。值得注意的是,《博徒别传》和《遮那德自伐八事》署“仪征陈大灯”,《露惜传》署“扬州陈大灯”。《清诗纪事》称,陈止,初名霞章,字孝起,号大灯,江苏仪征人^{*34}。由此可知,陈大灯即陈大镫。从字义上看,灯与镫都有“照明器具”的意思。此外,《风俗闲评》是“我国出版的第一部契诃夫的短篇小说集”^{*35},《婀娜小史》是托尔斯泰《安娜·卡列尼娜》第一个中文译本。

薛一谔是江都(今扬州市)人,曾任1902年创办的扬州苞亭学堂堂长^{*36}。陈家麟和薛一谔合译的作品有5部,分别是《海棠魂》(1908)、《青藜影》(1908)、《血泊鸳鸯》(1909)、《笑里刀》(1909)和《亚媚女士别传》(1910),全部由商务印书馆出版。

林纾(1852-1924),字琴南,闽县(今福州市)人,以古文翻译西方小说闻名于世。林纾表示,陈家麟精于英文,是他的“至好”,“时时过从”^{*37}。他们一共合作翻译了70种作品,其中,公开出版的有61种,未刊的有9种。陈家麟和林纾翻译了托尔斯泰、巴尔扎克和塞万提斯等名家名著。如,他们在1922年翻译的《魔侠传》,是塞万提斯《堂吉诃德》的第一个中文译本。

蹇先艾(1906-1994),遵义人,现代作家,曾在北京师范大学附中读书,1931至1937年间任北京松坡图书馆编纂主任,同时在弘达学院兼职。陈家麟和蹇先艾合作最少,只有8篇翻译小说,分别是华盛顿·欧文《鬼新郎》、《妻》;霍桑《步福罗格太太》、《牧师的黑面纱》;爱伦坡《亚西尔之家的衰亡》、《发人隐私的心》;马克·吐温《败坏了海德来堡的人》和史薇娜《一吻》、加斯忒尔《乡绅的故事》。其中,前6篇刊发于郑振铎主编的《世界文库》第二至第七册(1935),后收入单行本《美国短篇小说集》(1936);《一吻》发表于《文学季刊》(1935),《乡绅的故事》发表于《北辰学园》(1935)。

陈家麟独译的诗歌有3首,分别是《苏格兰田家小女行》、《哲学家的石头》、《返老还童》。他在河南大学任教期间,曾和同事伯仁、次公(邵瑞彭,1931年任河南大学国文系主任)合作翻译过9首小诗。值得一提的是,1933年,陈家麟和伯仁在《庠声》(《河南民国日报》副刊)上发表了译诗《云》,这首诗的作者是英国诗人雪莱。陈家麟其他合译诗歌,都发在《河南大学周报》上。陈家麟还和卢冀野合译过戏剧,都“译了七八十西页”,后因翻译理念起了争执,最终“那剧一本并未译成”^{*38}。

三、陈家麟译作一览表

笔者查询现有研究资料和部分原始图书报刊发现,陈家麟译作有106种,其中大部分是小说,以单行本形式出版的有61种。具体情况如下表所示:

译文篇名	原作者	译者	出版单位	时间	备注
海棠魂	英国布斯俾	薛一谔、陈家麟	商务印书馆	1908	
白头少年	英国盖婆赛	陈家麟	商务印书馆	1908	
博徒别传	英国柯南达利	陈大灯、陈家麟	商务印书馆	1908	
青藜影	英国布斯俾	薛一谔、陈家麟	商务印书馆	1908	
玊司刺虎记	英国哈葛德	林纾、陈家麟	商务印书馆	1909	
贝克侦探谈	英国马克丹诺保德庆	林纾、陈家麟	商务印书馆	1909	
血泊鸳鸯	英国哈葛德	薛一谔、陈家麟	商务印书馆	1909	
笑里刀	英国司提文森	薛一谔、陈家麟	商务印书馆	1909	
遮那德自伐八事	英国柯南达利	陈大灯、陈家麟	商务印书馆	1909	

露借传	英国司各得	陈大光、陈家麟	商务印书馆	1909	
亚媚女士别传	英国迭更司	薛一谔、陈家麟	商务印书馆	1910	
双雄剑录	英国哈葛德	林纾、陈家麟	《小说月报》1卷1期-5期	1910	1914年单行本(商务印书馆)
薄倖郎	美国锁司倭司	林纾、陈家麟	《小说月报》2卷1期-12期	1911	译者将锁司倭司国籍误为英国; 1914年单行本(商务印书馆)
小方篋	英国柯南达利	林纾、陈家麟	《时报》五月初一日-五月初十日	1911	
残蝉曳声录	英国测次希洛	林纾、陈家麟	《小说月报》3卷7期-11期	1912-1913	1914年单行本(商务印书馆)
古鬼遗金记	英国哈葛德	林纾、陈家麟	《庸言》1卷1期-11期	1912-1913	1912年单行本(广益书局)
黑楼情孽	英国马尺芒忒	林纾、陈家麟	《小说月报》5卷1期-4期	1914	1914年单行本(商务印书馆)
哀吹录	法国巴鲁萨	陈家麟、林纾	《小说月报》5卷7期-10期	1914	1915年单行本(商务印书馆)
罗刹因果录	俄国托尔斯泰	林纾、陈家麟	《东方杂志》11卷1期-6期	1914	1915年单行本(商务印书馆)
土馒头记	(俄国LEO TOLSTOY)	陈家麟、陈大镫	《中华小说界》第6期	1914	
石麟移月记	法国马格内	林纾、陈家麟	《大中华》1卷1期-6期	1915	1915年单行本(中华书局)
欧史遗闻·罗马克野司传	英国莎士比	林纾、陈家麟	《上海亚细亚报》9月10-10月3日	1915	1920年《广肇周报》(第69-77期)第二次刊发
天刑记	英国马克威鲁	陈家麟、陈大镫	《中华小说界》2卷7期-12期	1915	1915年单行本(中华书局)
水神		陈家麟、陈大镫	《中华小说界》3卷1期	1916	
犹龙录	英国雷卡德玛士	陈家麟、陈大镫	《中华小说界》3卷1期-6期	1916	1917年单行本(中华书局)
鹅尾七人	(德国 BROTHERS GRIMM)	陈家麟、陈大镫	《中华小说界》3卷5期	1916	
雷差得纪	英国莎士比	林纾、陈家麟	《小说月报》7卷1期	1916	
亨利第四纪	英国莎士比	林纾、陈家麟	《小说月报》7卷2期-4期	1916	
红篋记	英国希登希路	林纾、陈家麟	《小说月报》7卷4期-9期	1916	包括: 伊鲁马女优, 马格梯气球, 法国鱼雷艇受擒, 挖地道, 俄国驻土公使翻译官, 三十九号鱼雷艇, 无线电报, 俄皇后结婚时赠送之礼物, 煤矿罢工, 失去之条约, 林肯救国, 英国下议院美敦书于法国, 少尉夏雷尺石忒, 教皇宫内密室, 探海灯。
凯彻遗事	英国莎士比	林纾、陈家麟	《小说月报》7卷5期-7期	1916	
橄欖仙	美国巴苏谨	林纾、陈家麟	商务印书馆	1916	
亨利第六遗事	英国莎士比	林纾、陈家麟	商务印书馆	1916	
奇女格露枝小传	英国克拉克	林纾、陈家麟	商务印书馆	1916	
诗人解颐语	英国倩伯司	林纾、陈家麟	商务印书馆	1916	
鹰梯小豪杰	英国杨文	林纾、陈家麟	《小说海》2卷1期-5期	1916	1916年单行本(商务印书馆)
秋灯谭屑	美国包鲁乌因	林纾、陈家麟	《小说月报》7卷1期-2期; 8卷4号	1916-1917	包括织锦拒婚、木马灵蛇、梅过(1917)等。1916年单行本(商务印书馆)
(乔叟故事集)	英国曹西尔	林纾、陈家麟	《小说月报》7卷12期-8卷10期	1916-1917	包括: 鸡谈, 三少年遇死神(1916); 决斗得妻, 魂灵附体, 林妖, 死口能歌, 公主遇难, 格雷西达(1917); 加木林(1925, 刊于《小说世界》12卷13

					期, 此篇未标口译者)。
风俗闲评	俄国契诃夫	陈家麟、陈大镫	中华书局	1916	
孽龙七舌记		陈家麟、陈大镫	《中华小说界》3卷2期	1916	
乌鸦公主		陈家麟、陈大镫	《中华小说界》3卷3期	1916	
失果奇缘		陈家麟、陈大镫	《中华小说界》3卷4期	1916	
鸦言	(德国 BROTHERS GRIMM)	陈家麟、陈大镫	《中华小说界》3卷6期	1916	
鲍亦登侦探案	(美国 Scott Campbell)	陈大镫、陈家麟	中华书局	1916	
桃大王因果录	英国参恩	林纾、陈家麟	《东方杂志》14卷7期-第15卷9期	1917-1918	1917年单行本(商务印书馆)
女师饮剑记	英国布司白	林纾、陈家麟	商务印书馆	1917	
牝贼情丝记	英国陈施利	林纾、陈家麟	商务印书馆	1917	
社会声影录	俄国托尔斯泰	林纾、陈家麟	商务印书馆	1917	
天女离魂记	英国哈葛得	林纾、陈家麟	商务印书馆	1917	
烟火马	英国哈葛得	林纾、陈家麟	商务印书馆	1917	
拿云手	英国大威森	林纾、陈家麟	《小说海》3卷1期-8期	1917	
柔乡述险	英国利华奴	林纾、陈家麟	《小说月报》8卷1期-6期	1917	
路西恩	(俄国托尔斯泰)	林纾、陈家麟	《小说月报》8卷5期	1917	
人鬼关头	俄国托尔司泰	林纾、陈家麟	《小说月报》8卷7期-10期	1917	
婀娜小史	俄国托尔斯泰	陈大镫、陈家麟	中华书局	1917	
革心记	英国斯蒂温森	陈大镫、陈家麟	中华书局	1917	
惊婚记	英国司格得	陈大镫、陈家麟	中华书局	1917	
恨缕情丝	俄国托尔司泰	林纾、陈家麟	《小说月报》9卷1期-11期	1918	1919年单行本(商务印书馆)
玫瑰花	英国巴克雷	林纾、陈家麟	商务印书馆	1918	
现身说法	俄国托尔司泰	林纾、陈家麟	商务印书馆	1918	
十之九	丹麦安德森	陈大镫、陈家麟	中华书局	1918	译者将安德森国籍误为“英国”
焦头烂额	美国尼可拉司	林纾、陈家麟	《小说月报》10卷1期-10期	1919	1920年单行本(商务印书馆)
豪士述猎	英国哈葛得	林纾、陈家麟	《小说月报》10卷11期-12期	1919	
略史	英国亚波倭得	林纾、陈家麟	《东方杂志》16卷1期-9期	1919	1920年单行本(商务印书馆)
戎马书生	英国杨支	林纾、陈家麟	《东方杂志》16卷10期-12期	1919	1920年单行本(商务印书馆)
鬼窟藏娇	英国武英尼	林纾、陈家麟	商务印书馆	1919	
莲心藕缕缘	英国卡扣登	林纾、陈家麟	商务印书馆	1919	
铁匣头颅	英国哈葛得	林纾、陈家麟	商务印书馆	1919	
西楼鬼语	英国约克魁迭斯	林纾、陈家麟	商务印书馆	1919	
泰西古剧	英国达威生	林纾、陈家麟	《小说月报》10卷1期-12期	1919	1920年单行本(商务印书馆)
妄言妄听	英国美森	林纾、陈家麟	《小说月报》10卷3期-12期	1919	1920年单行本(商务印书馆)
鹤巢记	瑞士鲁斗威司	林纾、陈家麟	《学生杂志》6卷1期-12期	1919	1920年单行本(商务印书馆)
情天异彩	法国周鲁倭	林纾、陈家麟	商务印书馆	1919	
乐师雅路白忒遗事	俄国托尔斯泰	林纾、陈家麟	《小说月报》11卷4期	1920	
高加索之囚	俄国托尔斯泰	林纾、(陈家麟)	《小说月报》11卷5期	1920	原文未标口译者
还珠艳史	美国堪伯路	林纾、陈家麟	商务印书馆	1920	
金梭神女再生缘	英国哈葛得	林纾、陈家麟	商务印书馆	1920	
欧战春闺梦	英国高桑斯	林纾、陈家麟	商务印书馆	1920	
球房纪事	Counmt Lev Necolaevich Tolstay	林纾、陈家麟	《小说月报》11卷3期	1920	
洞冥记	英国斐鲁丁	林纾、陈家麟	商务印书馆	1921	
俄宫秘史	俄国丹考夫、法国魁特	林纾、陈家麟	商务印书馆	1921	

怪董	英国伯鲁夫因支	林纾、陈家麟	商务印书馆	1921	
炸鬼记	英国哈葛德	林纾、陈家麟	商务印书馆	1921	
魔侠传	西班牙西万提司	林纾、陈家麟	商务印书馆	1922	
三种死法	俄国Tolstoy	林纾、(陈家麟)	《小说世界》5卷1期	1924	原文未标口译者
亨利第五纪	(英国莎士比)	林纾、(陈家麟)	《小说世界》12卷9期-10期	1925	原文未标口译者
泛海	英国坦尼生	绂卿、次公	《河南大学周刊》第2期	1932	
澎湃复澎湃	英国坦尼生	绂卿、次公	《河南大学周刊》第2期	1932	
幽林鸥波	英国波朗令	绂卿、次公	《河南大学周刊》第3期	1932	1940年《新东方》(1卷3期)第二次刊发,署陈家麟
旅居思乡作	英国波朗令	绂卿、次公	《河南大学周刊》第4期	1932	1940年《新东方》(1卷3期)第二次刊发,署陈家麟
苏格兰田家小女行	英国渥兹渥斯	绂卿	《河南大学周刊》第5期	1932	
采蛭老人行	英国渥兹渥斯	绂卿、伯仁	《河南大学周刊》第7期	1932	
清泉	英国渥兹渥斯	绂卿、伯仁	《河南大学周刊》第8期	1932	
鳞墩战场	甘柏庐	绂卿、次公	《河南大学周刊》第15期	1933	
渔父歌	巴莉	绂卿、伯仁	《河南大学周刊》第15期	1933	
云	英国雪莱	绂卿、伯仁	《庠声》(《河南民国日报》副刊)第14期	1933	
鬼新郎	美国华盛顿·欧文	蹇先艾、陈家麟	《世界文库》第二册	1935	1936年收入《美国短篇小说集》(生活书店)
妻	美国华盛顿·欧文	蹇先艾、陈家麟	《世界文库》第二册	1935	1936年收入《美国短篇小说集》(生活书店)
步福罗格太太	美国霍桑	蹇先艾、陈家麟	《世界文库》第三册	1935	1936年收入《美国短篇小说集》(生活书店)
牧师的黑色面纱	美国霍桑	蹇先艾、陈家麟	《世界文库》第三册	1935	1936年收入《美国短篇小说集》(生活书店)
亚西尔之家的衰亡	美国爱伦坡	蹇先艾、陈家麟	《世界文库》第四册	1935	1936年收入《美国短篇小说集》(生活书店)
败坏了海德来堡的人	美国马克·吐温	蹇先艾、陈家麟	《世界文库》第七册	1935	1936年收入《美国短篇小说集》(生活书店)
一吻	捷克K·史薇娜	蹇先艾、陈家麟	《文学季刊》2卷3期	1935	
乡绅的故事	英国加斯恺尔	蹇先艾、陈家麟	《北晨学园》(《北平晨报》副刊)日期待查	1935	摘自蹇先艾《翻译的尝试》
毕士麦首相言行别传	德国卜释	陈家麟	《新东方》1卷3期	1940	
哲学家的石头	美国提露登	陈家麟	《新东方》1卷5期	1940	
返老还童	美国提露登	陈家麟	《新东方》1卷8期	1940	

附: 1.陈家麟、林纾未刊译作:《五丁开山记》、《洞冥续记》、《奴星续传》、《情幻记》、《眇郎喋血录》、《夏马城炸鬼》、《闷葫芦》、《盈盈一水》以及未定名一种(共9种,摘自《林纾研究资料》)。其中,《闷葫芦》、《盈盈一水》两种收入1994年福建人民出版社出版的《林纾翻译小说未刊九种》。2.在校对陈家麟译作目录时,笔者参考了樽本照雄编《清末民初小说目录》第10版。

【注】

- 1) 胡从经:《晚清儿童文学钩沉》,少年儿童出版社,1982年,第193页。
- 2) 胡从经:《晚清儿童文学钩沉》,少年儿童出版社,1982年,第193-194页。

- 3) 徐又春:《民国人物大辞典》(增订版),河北人民出版社,2007年,第1449页;淡泊:《中华万姓谱》(中),中国档案出版社,2006年,第1475页。
- 4) 刘卫东:《河南大学百年人物志》,河南大学出版社,2012年,第296页。

- 5) 《河南大学周刊》第2期, 1932年, 第3页。
- 6) 《〈益世报〉天津资料点校汇编》(2), 1999年, 第496页。
- 7) 高时良, 黄仁贤:《中国近代教育史资料汇编:洋务运动时期教育》, 上海教育出版社, 2007年, 第463页。
- 8) 陈华新:《百年树人:上海交通大学历任校长传略》, 上海交通大学出版社, 1997年, 第77页。
- 9) 《天津河东政协文史资料》(第7辑), 政协天津市河东区委员会, 1994年, 第211页。
- 10) 刘沪:《北京师大附中》, 人民教育出版社, 2000年, 第120页。
- 11) 郑逸梅:《艺林散叶》, 中华书局, 2005年, 第254页。
- 12) 张旭:《林纾年谱长编》, 福建教育出版社, 2014年, 第89页。
- 13) 朱有瓚:《中国近代学制史料》(第三辑·上册), 华东师范大学出版社, 1992年, 第587页。
- 14) 徐又春:《民国人物大辞典》(增订版), 河北人民出版社, 2007年, 第1449页;淡泊:《中华万姓谱》(中), 中国档案出版社, 2006年, 第1475页。
- 15) 《河南大学周刊》第2期, 1932年, 第3页。
- 16) 陈家麟:《大战后欧洲各国师范教育概况》, 《北京高师教育丛刊》1923年第1期。
- 17) 《咨呈国务院对于院参议核复陈家麟条陈所拟具体办法略抒管见文》, 《教育公报》1923年第10卷第5期。
- 18) 《胶澳商埠局委任令:第七四号》, 《胶澳公报》1925年第253期。
- 19) 《筹备接收威海卫委员》, 《晨报》1927年3月21日第3版。
- 20) 《鲁交涉署长易人》, 《益世报》1927年3月24日第3版;同日,《晨报》第3版也有报道。
- 21) 《大元帅令:大元帅指令第三百二十四号》, 《政府公报》1927年第4121期。
- 22) 《鲁张请奖陈家麟》, 《益世报》1927年11月3日第6版。
- 23) 《省府三十五次委员会会议》, 《山东民国日报》1929年10月26日第5版。
- 24) 《函土地局定期拍卖前山东交涉员陈家麟房产请届时派员莅场协助由》, 《北平特别市市政公报》1930年第36期。
- 25) 卢前:《卢前笔记杂钞》, 中华书局, 2006年, 第137页。
- 26) 卢冀野:《中国戏剧概论·序》, 世界书局, 1944年新一版, 第1页。
- 27) 蹇先艾:《翻译的尝试》, 《蹇先艾文集》(3), 贵州人民出版社, 2004年, 289页;郑振铎:《世界文库》(2), 生活书店, 1936年, 版权页。
- 28) 张挥等:《前进在时代洪流中—弘达中学地下党的革命斗争》, 《往事珍影:北京西城老同志回忆》, 中共党史出版社, 2006年, 第39-40页。
- 29) 蔡鸿源:《民国社会党派大辞典》, 黄山书社, 2012年, 第88页。
- 30) 《武汉市志》(外事志), 武汉大学出版社, 1991年, 第8页。
- 31) 罗加岭:《扬州近代著名翻译家陈霞章》, 《扬州晚报》2010年12月11日B3版。
- 32) 刘梅先:《扬州杂咏》, 广陵书社, 2010年, 第40页。
- 33) 梁实秋:《雅舍随笔》, 江苏人民出版社, 2015年, 第129页。
- 34) 钱仲联,《清诗纪事》(二十一), 江苏古籍出版社, 1989年, 第15344页。
- 35) 平保兴:《〈风俗闲评〉及其考释》, 豆丁网2013年3月21日, <http://www.docin.com/p-1099058926.html>。
- 36) 张允生:《古运河畔“育才”的摇篮》, 《江都文史资料》(第九辑), 1999年, 第97页。
- 37) 林纾:《〈云破月来缘〉序》, 《林琴南书话》, 浙江人民出版社, 1999年, 第119页。
- 38) 卢前:《卢前笔记杂钞》, 中华书局, 2006年, 第137-138页。

(筆者系中国《上海行政学院学报》编辑)

清末小説から

崔文東氏よりご教示いただきました。感謝

相場守胤〇日本におけるシチェドリン紹介の歩み

『文化と言語:札幌大学外国語学部紀要』

第16巻第2号 1983. 3. 25

— 〇「日本におけるシチェドリン紹介の歩み」

- の翻訳・紹介文献目録補遺訂正 『文化と言語：札幌大学外国語学部紀要』第18巻第1号 1985.3.25
- 王 曉丹○『翻訳史話』北京・社会科学文献出版社 2000.9 百年中国史話
- 趙山林、田根勝、朱崇志編著○『近代上海戯曲系年初編』上海世紀出版集團、上海教育出版社 2003.7
- 趙 山林○『中国近代戯曲編年(1840-1919)』上海・華東師範大學出版社2008.9
- 寇 振鋒○『三十三年の夢』の漢訳本『三十三年落花夢』について 名古屋大学『言語文化論集』第31巻第1号 2009.10.9
- 福田忠之○清末上海のグラフ雑誌『図画日報』(1909-1910)に関する一考察 神奈川大学『年報 非文字資料研究』第7号 2011.3.20 電字版
- 龔 敏○黄人訳述小説《唾旅行》の発現及其価値与影響 『澳門理工學報』2011年第2期(総第42期) (2011.4.15) 電字版
- ○黄人訳述小説《唾旅行》の発現及其価値与影響 鄒振環、黄敬斌執行主編『明清以来江南城市發展与文化交流』復旦大學出版社2011.12 未見
- 鄭 鈺潔○『福爾摩斯偵探小説漢訳研究』河北大學文學碩士學位論文 2012.5
- 付建舟編○『晚清民營書局發行書目』上下冊哈爾濱・黑龍江教育出版社2016.12
- 傅謹主編○『中国話劇百年典蔵 理論卷1(1906-1929)』北京・人民文學出版社2017.4
- 竇 新光○【書評】李艷麗『晚清における日本語小説の翻訳及び紹介に関する研究(一八九八～一九一一)』 『日本研究』第55集 2017.5.31
- 清地ゆき子○重訳《俄国情史》をめぐって——「自由結婚」と革命 『或問』第31号 2017.6
- 王 桂妹○重估五四反对派：從林紓的“反動文本”《荊生》《妖夢》談起 『西南大學學報(社會科學版)』2017年第43卷第4期 2017.7 電字版
- 郝 慶軍○『民国初年の文學思潮与文學運動』北京時代華文書局2017.7 中国藝術研究院學術
- 文庫
- 田 雁○『日文図書漢訳出版史』南京大學出版社 2017.12
- 李 同良○『訳苑芳菲——浙江女性翻譯家研究』杭州・浙江大學出版社2018.3
- 郭 浩帆○『近代報刊視野下中国小説轉型研究』北京・科學出版社2018.4
- 趙 驥○明清小説与民初新劇——以鄭正秋《新劇考証百出》為例 『明清小説研究』2018年第2期(総第128期) 2018.4.15
- 王 家平○『《魯迅訳文全集》翻訳情況与文本研究』北京・社會科學院聞見出版社・人文分社 2018.5 京華學術文庫
- 姜 榮剛○從《盧梭魂》到《双杯記》：“情”、“魔”之間的敘事轉換——關於近代言情小説敘事模式嬗变及其成因的一種歷時考察 『中国現代文學研究叢刊』2018年第6期(総第227期) 2018.6.15
- 潘 瑤菁○《欧美名家短篇小説叢刊》来源叢考 『文匯學人』第347期 2018.6.22



- (日) 樽本照雄著、李艷麗訳○『林紓冤案事件簿』北京・商務印書館2018.7 商務印書館海外漢學書系
- 宋 莉華○近代伝教士对才子佳人小説の移用現象探析 『文學遺産』2018年第4期 2018.7.15